

政治地理

天然の勢力が人間社會に及ぼす影響を究むる頗る趣味ある學科。政治地理は未だ甚だ幼稚に屬せり故に政治地理の本領及其範圍に對しては世間未だ頗る惑ふ者あり自然地理を學べども其人事と聯關するの理を究むることは甚だ稀に又歴史を講ずる者はあれども其事實が常に自然と相關する所以を説くこと尠なし政治地理は實に其間に立ちて之を聯結總合する要科と謂ふべきものなり。

常に政治地理を以て呼ばるゝ學科は英語の所謂 Political Geography として其譯字によりて直に政治地理と名けらるれども是れ全く此學科の意の悉くしたるものにあらず故に種々の名を以て呼ばるゝことあり天文學若くは地文學に對して之を人文地理と云ひ又此學科の専ら人

間社會と地理との間に起る事實を説くより之を人事地理と云ふ者あり或は邦國の制度文物等の地理と相關する所以を説くより邦制地理又は國家地理等の名を與ふる者あれども要するに皆悉く政治地理に外ならざるなり。政治地理なるものは斯の如く其範圍廣きを以て他の諸學科と關係する隨て廣し政治學、史學、社會學、人類學、經濟學等とは其關係特に親密なり斯く關係の廣きにより世人或は政治地理を以て事彙的學問の如く誤想するものなきにあらず然れども政治地理は決して不獨立の學科にあらず此等諸學科の間に特立して超然一系統を有するものなり。凡そ人類社會の事甚だ多端なりと雖も其多くは地理的模型より出でざるものなし社會と云ひ政治と云ひ皆是れ地理的範圍内に支配せらるゝ一現象たるのみ看よ沙漠の内に國家の成立あるか熱帶圈中に立

憲制度の行はるゝ獨立國あるか、將た現今の文明國は、何故に北緯の或る並行線内に限らるゝや、凡そ此等の如き社會發達の原由に關する重要問題は、何學科の解釋を待つや、且つ我日本國民の如きは、特に此學科の必要を見る、我帝國の帝國たる原由、特殊なる我國家の組織機關、及其現今に於ける進歩、我國風の由來、國家富財の淵源等、凡て國家重要な事項の基づく所の如きは、苟も立憲制度の下に在る國民は、深く之を考究して、益々其發達進歩を希圖せざるべからず、次に政治地理の最も深く關係を有する史學、人類學、經濟學の三科とは、著しく親密なるも、而かも三科に對して特立の地歩を保つ所以を説き、以て政治地理の本領を明にせんとす。

地理年月は歴史の雙眼とは、是れ古來稱道する所にして、歴史の地理に關係あることは、既に之を認めたりと見へたり、然れども、重に歴史より

地理に應用したるまでにて、地理學より歴史を講究したることは、實に稀なり、故に其考證頗る明瞭を缺き、往々信憑し難きことなきにあらず、願ふに人類の史乘に現るゝ事實は、皆人類と場所即ち地理との間に起る事實にして、人類が此地球上を以て自家の活劇場として、動作競逐せる結果なれば、其場所なる地球、即ち地理的と分離するときは、正當なる過去の事蹟は追究し能はざるなり。

凡そ歴史には、各々其國固有の發達あり、又變遷あり、英國史は英國的の發達を示し、支那史は支那的の發達を認む、斯の如く各國の史乘に現はるゝ發達變遷の狀況、一も相同じきこと能はざる所以のものは、如何試みに此疑問を將て、各國自然の現象に就きて之を觀るべし、其山岳、其河流、其平原、其氣候等、大體の形勢に於ては、著しき差異なきが如しと雖も、些細に察相するときは、實に千差萬様、各國一も相同じきものなく、種々

の形状なるを發見するならん、是れ則ち各國史上固有の變遷發達を來たせる原由なりと謂はざるべからず。例へば或る風土の關係は、其社會及政治の發達を促せし原因となりしこともあるべく、或は却て之を妨げしこともあるべし、又或る自然の地勢は、英雄豪傑の遠征に通路の便を與へ、其統一の偉業を幫助せしこともあるべく、又は其地天然の障害ある爲め、到底統一の鴻圖を完ふすること能はざりしが如き所もあらん、或は通商貿易の業、夙に發達せる國は、其海陸の形勢に基づくが如き、又は文學宗教の特異なるは、其國土の地理的現象に由來するが如き、其大源は一も地理的範圍を脱するものあらざるべし。以上の觀察法に據りて、更に歴史上の基源となるべき都會城市等に就て、之を觀るに、他の一方に廣大なる空地あるに拘らず、何故に其一小部

に限り、特に人口輻湊して人事繁榮し寸地をも争ふに至りしや、其由來を原ぬれば、必ず河道の便あるか、肥沃の平原あるか、將た海岸線の灣入あるか、然らざれば、特種の産業に適するかの土地に限るが如く、皆悉く地理的事情に支配せられざるものなし。之を要するに、國の發達變遷は、斯の如き自然の模型より出たるものなれば、此模型如何の講究を経て、始めて過去の變遷を追想し得らるべし。地學は史學の物理的基礎にして併せて人生活動の物理的基礎なりと何となれば、吾人人類の周圍に羅列し、散在し、活動する山河海洋湖沼平原森林及び生物、礦物氣候等の諸現象は、悉く吾人人類の動作に大影響を與ふるものなればなり。地を離れて人なく人を離れて事なしと政治地理と人類學との關係は、近時特に人類地理なるもの勃起し、其政治地理の一部を占むるにより

て知るを得べし、今各國住民に就て、之を觀るに其人種、言語、風習、等其國を代表して各々異なり、然れども本來決して其區別あるものにあらず、人種の如きは現今に及びては既に非常の差違ありて殆ど天然固有の別あるが如く見ゆるものすら、其始は蓋し相距る遠からざりしならん、彼の齊しく「アリヤ」の同一種に就ても「ヒマアラヤ」山下に遷りし印度人と「ライン」河畔を占めし「チュウトン」種とは其言語風習は勿論、容貌性質までも著しく相違し、一見直ちに其別を見別るに難からざるに至りしものは、其原因全く風土的事情に支配されたるものなり、例へば氣候に應ずる食品の種類、衣服の需用、家屋の構造等より襲受すべき地方的異風、或は機能體格の發育、皮膚の色素に及ぼす温度の勢力等、一として地理的によりて定まらざるものなし、故に近く之を見るに大山脈、海灣の如き、自然に人種の境界線となることあり、時としては一河一湖沼も人

種の境界たること往々にして發見する所なり、言語の如きは既に一國內に於てすら、區々の差別あれば、人種の地理に支配せらるゝよりも、尙一層地理形勢に關して定まるとは、各地の實例に徴して明なり、其他國民の氣質習慣も、周邊の地理情況によりて、涵養せらるゝもの亦頗る甚たしきものあり、各種の人類が種々の異なる土地に移住し、營作したる結果の跡に就て之を觀れば、地理の人類に就て、研究の要素たることを知るべし、或者は自然力(動植物等)の發達壯大なる所に移り、之を利用し、依りて以て大に發達し、遂に國運の隆盛を來せるものあり、又或者は、食品及び他の需用品、欠乏の地に移りしが爲め、國歩進まず、數千年來曾て其情況の異なることなきものあるは、現今世界各部に散在する住民に就て見るを得べし、是れ皆周邊の自然力によりて然りしものなり。

然りと雖も、人類の自然力を利用するの度には、自ら限りあり、例へば未開の状態にある人類は、周囲の自然力壯大に過ぐるときは、之を制すること能はず、却て之れに萎縮し、自家の状態を變更するか、否らざれば此事情に壓服せられ、呆然として天與に安ずるの外進で之を利用すること能はず、是を以て住民の營作は個々の孤立運動となり、國運發達に必要なる共同心を惹起すべき刺激を缺き、有限の境界に止まりて更に發達することなし、之に反して天然力の發達人類の程度に應ずるものは之を利用して國運は漸く進歩するに至るべし、而して文運の漸く進歩するに至れば、多々益々周邊の自然力を應用し得て、國運愈々隆盛を極むるに至るものなり、斯の如く人類の程度に應ずる自然力の分量は政治地理の示すべき要件なり。

「國の生存には經費を要すと、凡そ國家の進歩は、其國産業の發達如何に

關することは、人の知る所なり、而して産業の要素となり、國家の財源となるべき天産物と人造品とを問はず、其原料は一として之を地理の範圍内に仰がざるものなし、是を以て政治地理は動物植物及礦物の風土的配置を講究して、移住地を撰定し、通商運輸の便否を審かに調査して人口の轉流を促し、若くは輻湊地を指定するが如き、經濟上政治地理の應用は、決して缺くを得ざると同時に、政治地理に經濟學の關係は、亦甚だ密なり。

抑々人生の需用は衣食住より急なるはなし、而して之を需むるには、假令へ天然の産、豊富なる地なりと雖も、只手を拱しては得ること能はず、何れも多少の勞力によりて、始めて之を利用することを得べし、之を得るの勞力は、即ち職業と稱す、故に職業は必ず其土地天與の生産に富める物料に傾く事は、自然の勢なり、例へば森林に富める土地は、之に依り

て生を營める木挽業、薪炭業等の林業者多く、又肥沃の平原地には、之れに耕し、之れに牧する、農業者多し、濱海の地には、漁業者多く、礦物に富む地には、坑業者多きが如く、生業の配布なるものは自ら其地自然の指定に従ふて決す。

既に生業の配布を生ずれば、各生産者と需用者との間に立つ、媒介者なかるべからず、各生産者は自ら使用して餘裕ある物品を以て、他の須要なる物品と交換せんことを望むと雖も、自ら一々各家に就て問ふの煩は到底堪ふる所にあらず、是に於て媒介者ありて相互の願望を達せしむ、是則ち商業者にして、爰に初めて通商貿易の法起るに至るべし、國運は斯くの如くにして漸次に發達し、文物も之れによりて進歩するを以て、政治地理としては必ず先づ各種生産物の配布を究め、次に品質の良否、産額の多寡、其製出せらるゝ總ての情況より、運搬の便否、販路及生産

の景況、産地住民の種類状態等をも、講究せざるべからず、故に此方面より觀るときは、之を商業地理と云ふ。

政治地理の講究を要する事項は、前述の諸件に限らず、稍其地歩を進めて講究す可きは、政治的境界線の查定の如き、若くは國防線の成定の如き、是なり、彼の現に地圖上を彩どる、國境線の如きは、或る一時に於ける國際競争の結果にして、住民各團體の勝敗線を示せるものに過ぎず、故に悉く永久に保持し得べき性質のものにあらず、國運の盛衰に伴ふて、漸次變更を生じ、終には國境線たる性質を失ふに至るものあり、然れ共精細に觀察すれば、恰も天然の境界の如く、確然として國境線の性質を有するものなきにあらず、斯の如きものは、設令一時の權略によりて國境線を滅すと雖も、再び國境線となるものなり、又一國內に於ては、行政區畫、司法區畫、軍區選舉區及び警察區畫の撰定の如き、其基礎は、必ず政

治地理の指示する所に準據せざるべからず。國防線の如きは時運の如何と對外の事情とに應じて、自ら變更なきにあらずと雖も、要するに一國防禦の幹線は、必ず一定存在せずんばならず、此等の主要なる問題を解釋し、成定すべきは、是れ政治地理の任務なり。

終りに政治地理の範圍及任務の要領を約言すれば、(一)政治地理は地理的事情に支配せらるゝ國家の變遷發達、(二)各様の地理に圍繞せらるゝ人類の品類習俗、(三)生業産物の配置を究め、(四)移住地の指定、通路の撰定、國防線の成定等を講ずるにあり、而して地球を以て人類の社會又は國家とし、其表面に於ける天然の状態は、人類を圍める風土的境遇にして、吾人は其中心たり、根本なりとして、講究せざるべからず。

關東及關西

關東及び關西の稱たる其由來久し、何を以てか此の特殊の稱あるや、蓋し是れ政治的名稱にあらずして風土的名稱たるや明なり、則ち關東と關西とは、そが風土的現象に於て著しき相違あることは、千數百年前の祖先も既に之を彷彿の間に認め、斯る風土的名稱を與へしなるべし、而して爾來幾多の星霜を経るも此の關東關西なる名は遂に堙滅すべからざる一種の趣味ありて今日に馴致せしものならん、此の藪爾たる蜻蜒背裏にある日本にして何故に關東關西なる特稱の止むべからざるかは、少しく之を日本の自然に徴して考究せざるべからず。抑々我自然の日本は其地體の構造上、東半部と西半部とは全然殊別なるとは、輓近地學の進歩と共に既に明なるに至れり、蓋し我日本の地形

たる許多の島嶼を以て構成する多島國なり而して其群島は外觀上個々別々相隔離すと雖ども地體構造の上より觀るときは決して各島相散亂せるものにあらずして島嶼は概ね西南より東北に亘る一系統を有す若し太平洋の水準をして今六百尺低からしめば帝國の各群島は悉く連絡して弓形の陸地となり其北端は樺太より西伯利に接し南端は九州より支那に續き亞細亞大陸との間には日本海の一大湖を存せんとのみ而して尙ほ地層の走向に就て之を視れば此一系統上に横はれる我國土は其中央より切半して明に二種の隆起帶より成ることを知り則ち中央以北の隆起帶は悉く東北より西南に趨り中央以南の隆起帶は西南より東北に趨り前者は日本々州の北翼を構成する隆起帶にして所謂樺太山系の名あるものなり後者は本州の南翼を構成する隆起帶にして崑崙山系と稱するもの是なり本州は此の兩大山系の

集合より成れる地體なり而して兩大山系の相會する所は恰も本土の中央に當り北は越中より信濃甲斐駿河相摸伊豆に亘れる本邦中最も高峻なる山岳の競立せる地なり斯く高峰の競立するは我國地體構造上最も重要な一地帯の存在する證據にして即ち樺太崑崙の兩地體の接合する縫裂線に沿ふて火山の噴起したるものなり故に此等の火山は悉く接合帶上に連聳し北は越の海岸より起り諸火山を通じて東南に延ひ八ヶ岳富士山箱根山の如き火山となり尙ほ伊豆七火山島より遙に南方に趨る一列の大火山脈あり此脈は其名を富士の大火山に取り富士帶と名けられたり

富士帶は恰も日本帝國を兩分すべき噴起帶にして此帶以北の地を地理學上北日本(即東半)と稱へ以南なる地を南日本(即西半)と謂ふ故に地理的北日本は人事的關東にして地理的南日本は即ち人事的關西なり關

東は樺太山系を以て組成せられ關西は崑崙山系を以て構成せらる而して之を兩分する地理的富士帶は是れ則ち人事的の所謂關の名あるものにして東西の關門となり實に日本の國土をして東西の別あらしむる自然の境界なり左れば此帶を踰へて東より西へ又西より東へ通過すべき線路は屢かに四條に過ぎず則ち帶の北端日本海に迫る所を通ずるに有名なる親不知の嶮路あり帶の中央には野麥峠を踰へ若くは棧道雲深き木曾山道を辿らざる可らず而し帶の南端を過る街道は則ち所謂函嶺なり

以上の解説に據れば自然の我郷土は其東半と西半とは著しく相異なり而して之れを兩分するにも亦た著しき一障礙あるを知るべし是を以て其相異と障害とは國民の營作競逐に影響を與へ之れが證據は我國の歴史に於て住民の氣質に於て國家經濟上に於て其他萬般の事に

於て關東と關西とにより頗ぶる差違あらしめたり古來關東關西の稱の止むべからざるものは則ち是れなり關東關西の分界は古より一定せしにあらざ關東とは或は足柄山以來を云ひ或は碓氷峠を云ひ又は函根以東を云ふ或は又鈴鹿關以東を關東と云ひ以西と云ふ余が所謂關東關西とは富士帶を以て分界とせるあり

我帝國歴史上統治權の東漸せる次第を案すれば一の格段なる點あるを發見すべし則ち我版圖の西半部の速に皇澤に霑ひし割合に東半部の久しく皇威に服せざりしと是なり神武大帝の東征以來西半部は屢に數代の間に業已に之を平定統一せられたるに拘らず其東半部を顧みれば蒸莽深く蔽ふて永く蠻境に委し爾來實に二千五百有餘年の間快く皇命を領したると誠に尠なく較々もすれば西來の命を拒み常に分離せんとするの傾向ありしは此の東半部なりし彼の上古叛服常な

しと稱して世々の皇慮を煩はし玉ひし東夷の跋扈桓武帝の朝には若
磨の不逞中古に於ては安倍氏の叛亂近古に至りては鎌倉幕府の創建
次て上杉管領の崛起近代に及べば江戸幕府の建設あり凡そ此等の事
實は要する所關東分離の傾向にして東部に據りて以て隱然日本を切
半するの概ありし是を以て永く全國を統一制御せんには先づ眼を此
兩部を約すべき富士帶に注がざるべからず看よ古來都を南日本に置
きて天下を制せんとすれば關東先づ離れ又都を北日本に置けば固よ
り關西の分離すべきは理の當に然るべき所なりされば平安城の式微
又は室町政府の統御權なかりしと若くは織豊二氏の永久せざりしと
等固より深く怪むに足らざるなり之に反して南北兩日本を接合する
富士帶附近に據りし數氏は皆先づ天下の勢を制ずるとを得たり是れ
我邦土自然の形勢を詳にせば然らざるを得ざるの勢なるを知るべ

し
尚ほ我國人文の發達上より謂へば關西は日本の舊邦にして關東は日
本の新野なり故に一般の傾向に於ても關西は舊守主義にして關東は
進取主義なり關西は舊古を崇拜し關東は新奇を競争す關西は溫故的
にして關東は知新的なり東京の新都は關東の代表府にして西京の舊
都は關西の代表府たり此新舊の相違は尚ほ兩地の天然にも徴するを
得べし關東の地質は重もに新火山岩より成り山勢總て高峻にして豪
宕なれども關西は舊火山岩たる花崗岩に富み優美なる白砂青松の美
景多し故に其人質に於ても關東は粗豪にして關西は溫雅なり關東人
は任侠にして意氣を貴べども關西人は沈綿にして暴露を卑む其言語
に於ても關東語は峻嶮にして圭角を存ずれども關西語は圓曲にして
優柔なり東京の『げす』は西京の『ちます』にして東京の『だから』は西京の

『さかい』なり。又關西よりは古來理想的の人を出し關東よりは實利的の人を出す是を以て較々もすれば關西は英雄崇拜に傾き易く關東は寧ろ黃白崇拜に陥り易し顧ふに歴史は關東關西の特質を説明して餘りあり例へば源平の戦史は關東關西の競争にして平民は關西の總てを代表し源氏は關東の總てを代表したるものにあらざる乎

關東と關西とに於る富之程度と生業の如何を觀察すれば尙許多の相異なれる事項を發見すべし先づ富の程度に就て兩地を比較すれば關西は帝國の舊土にして古來他の事業は發達進歩し關東を幼稚視したるに拘らず獨り富有の度は未發達なる關東の新野に及ばざるの事實あり即ち現に關東に住する者は二百六十三萬三千戸にして其内所得納税者は五萬四千二百餘戸あり之を平均するときは千戸の内二十戸六の納税者あるに當れり顧みて關西を視みれば三百八十六萬四千戸

の現住者あれども所得納税者は五萬二千一百餘戸なれば千戸の内十三戸の納税者あるに過ぎず次に其所得額に就て之れを視るも關東は一千五百二十一萬の人口を有して所得總額(所得税に)は四千四百五十萬戸なれば一人人口の分頭平均二圓九十錢に當れり然るに關西は其人口二千五百五十三萬を有して所得總額は三千七百五十七萬圓なり故に一人の分頭平均は一圓四十錢なれば即ち關東の半額に及ばず是を以て所得税に對する關東の富の程度は關西に倍するものと謂ふを得べきなり

以上示すが如く富の程度に於て著しき差違あるものは其原因一にして足らずと雖ども要するに關西の凡て舊守的にして關東の進取的なる結果に歸せざるべからず其生業産物に就て之を觀よ關西は其地味決して關東に劣らず又耕地の面積も關東に譲らず否此兩者は關西の

關東に勝ること數等なり、然るに獨り富の度の比較的に新開野たる關東の半ばにも及ばざる所以は如何、是れ關東の富源は我邦古來唯一の特産なるが如く思へる穀産にあらざることを知るべし、即ち關東の富源は外交以後専ら貿易品たる蠶糸是なり、抑々蠶糸は外國輸出のみにて、も約年五千萬圓(明治三年)の巨額に達し、我邦第一の國産たり而して其生産地を問へば實に殆ど關東に限れり、蠶糸の最近産額は全國に於て二百五十萬貫あり、其内一百八十萬貫は關東に産する額なるを以て全國總産額の七割二分は關東産に係る、故に此割を以てすれば最近に於ける蠶糸類の輸出額五千萬圓の内三千六百五萬圓は年々關東に流入する額なるべし、是れ實に關東崛起の財源の謂ふべきなり。

夫れ關東は日本の新野にして火山岩多く土壤比較的に瘠薄なり加ふるに氣候隆寒にして農耕に利あらず、故に舊套を固守して只管富を穀産

にのみ仰がば我國の貧地たらんのみ、然るに養蠶製糸と云へる一大生業を覓め依りて以て駸々として發達し、既に其富の程度の如きは古來の發達地たる關西に倍するに至りしものは關東の進取に富める結果として觀るを得べし。

然れども過去を顧よ、我帝國を建設せしは關西にあらずや、帝國をして萬古不易の基礎を爲さしめしは關西にあらずや、日本の文華を啓發せしめしは關西にあらずや、東洋の美術國たらしめしも亦關西にあらずや、將た維新の大業を翼賛せしも亦主として關西にあらずや、凡そ此等の過去を閱し來れば、轉た關西の雄大を認めざるべからず、嗚呼、崑崙山系上の關西は、近今に於て大ひに發達進歩の徴を現はし來れる、樺太山系上の關東に向つて將た何を以て抵抗競進せんとするや、

湘 南 名 勝

湘南に名勝多し。鎌倉の古趾、函嶺の温泉は更なり。大磯、陶綾、鷗沼、江の島、皆山海の勝に富み、紅塵裏底の生靈が唸喘の快を試むべき處なり。中にも三浦半島は東京灣と相模洋との分界をなせる岬岨にして、東に東京灣を受け、西、相模洋に向ひ、其景決して凡ならず。上手浦(東)の金澤(武藏)長浦、横須賀に於ける下手浦の浦賀、久里濱に於ける又西浦の逗子、葉山、三崎に於ける直に南洋新渡來の大氣を受け、海濶く山青し、特に西浦は緑波を隔て、富士の高嶺を望み、江の島前面に横はり、湘南諸勝の随一と稱するも決して溢美にあらざるなり。

西浦諸勝の一なる逗子は、古の厨子にして、今田越村の一小字なれども、横須賀線鐵道の停車場を逗子に設置せしより、逗子の名今は却て田越

村を代稱するに至れり。田越は古の多古江之濱にして、多古江の水、今田越川、其中央を南流し、多古江濱に向つて數十町歩の流域を開けり。川の右岸は逗子にして、左岸を櫻山と稱す。田越村は此等小字の總稱なり、而して三浦半島は頗る古き歴史を有せり。上古は暫く措き、此地の三浦と名づけられしは、康平年間(今より八百年前)三浦長門守爲通、戰功によりて三浦郡を領し、奥州より移りて衣笠城(今の衣笠村)に居る。夫より相續て平治の頃には三浦太郎義次、天仁の頃には三浦平太夫爲次、治承の頃には三浦大介義明、及其子次郎義澄等、世々衣笠城に居り、其子孫郡内に分居し、三浦の名聲大に揚り、九十二豪傑等の勇名を博し、所謂三浦一族なるもの生ぜり。徳川氏に至り、松平大和守本郡を領せり、故に今の逗子、櫻山等は松平大和守の領地なりき。

逗子は前に言へる如く、田越川の開ける流域地にして、此流域の西北を

限るに新宿の丘陵あり、其丘陵の相模洋に突出するを小坪崎と云ひ、其西は即ち小坪村にして、直に滑川の流域なる鎌倉に連る、又逗子平地の東南を擁するに櫻山の丘陵あり、此丘陵は海面を抜くと一百二十尺に過ぎざれども、陵脚海に近く眺望の佳なる多く見ざる所なり、此山古昔は瀟山皆櫻樹にして、芳春開花の候は遠く筈を曳く騷客多く、故に櫻山の名ありき、建武年間僧疎石(夢窓國師勅召によりて彼の夢の世に夢と云ふも夢なれば夢と云ふべき言の葉もなしとの一國歌を残して、京都に上洛せし時、土産として此山の櫻樹數株を携へて遂に大和芳野に移植せりと傳ふ、當今の芳野櫻は此の遺孽なるや否固より知るべからずと雖ども、其幾分は此山靈の系統を帯びるは事實ならん、櫻山の丘陵迤斜して多古江に臨む所、老松數株蒼龍の如く天に參差する邊、一仙庵あるは即ち徳富洪水先生の『老龍庵』なり、多古江の水其下を流れ、斷橋之

に架す橋を渡れば、神風亭の浴場なり、浴舎數棟鱗比せり、其内の通路に臨める一小舎は、前文相梧陰先生が曾て病癒を養はれし所なり、多古江之濱は平沙相模洋の綠波と相連り、小坪崎及葉島の黛巒左右より出で、之を擁し、風景の秀美なる多く得易からず、左れば源右府も此風光を愛し、政務の餘暇には屢々此邊に散策を試みたりと云ふ、東鏡にも、建久五年八月廿六日、賴朝公多古江の島に逍遙し給ふ云々と記せり、逗子の平地を拓ける主要の田越川は、其源三派あり、一は沼間村より發して西に趨り、一派は池子村の山間より發して西南に流れ、山根村附近に於て相合して西流し、多古江濱に注ぐ、河身廣きにあらず、河道亦長からざれども、田越の農産地を拓き、逗子の風景を添ふるには決して缺くべからざる河流なり、若し夫れ月明に風清き夕、此溪流に棹さば、其神氣を養ふに於て幾何ぞや、此河の上流を御最期川と別稱す、是れ平維盛の

子六代御前(妙覺禪尼)平家没落の後、岡部權守泰綱の爲めに此河畔にて命を落せるを以て、里人今に御最期川の稱を傳ふと云ふ。逗子村に古刹ある延命寺と云ふ、眞言宗に屬す、此寺は永正年間小田原北條氏と綱代導と合戦の後戦死者を合葬し、地藏を安置して綱代導の祈願所と定めたりと云ふ、寺に寶物として左の諸品を藏す。

一北條氏直の家臣山中上總助雨乞願書

一通

一北條氏直奉納の愛染明王の掛物

一幅

一綱代導奉納の弘法大師作不動打出小槌

一個

逗子の附近遊覽散策の名勝舊跡所々に存す、多古江の長堤に沿ふて東北に進めば沼間あり、此處に神嵩醫王山あり、一丘陵なれども其頂上には弘法大師護摩壇の跡と稱する遺跡あり、又天狗腰掛松と稱する老松あり、其傍に縁結びの柳あり、慈覺大師扶坐の石等あり、又醫王山神武寺

あり、天台宗にして鎌倉寶海寺の末寺なり、東鏡に承元三年五月五日實朝將軍神嵩藥師參詣の事を記せり、寺に寶物として三浦荒次郎産衣の鎧及天狗爪等を藏す、又長谷山海寶院あり、富士眺望の勝地なり、此寺は元と横須賀にありしを徳川家康、保壽寺の高僧にして菊長老と稱せられたる菊の愛育者之源和尚をして此寺を管せしむ、此僧又酷だ富士眺望を好むを以て、富士眺望の勝地なる此地を請ふて寺を遷せりと云ふ、逗子より南方に赴けは即ち今の葉山なり、此地は元と三ヶ浦村或は堀の内と云ひ、浦賀路と三崎路と分るゝ處に葉山茶屋と稱するありき、因りて葉山と稱するに至れり、此地鎧摺心無佐賀岡の三海濱故に三ヶ浦村と云ふありて眺望亦甚た佳なり、千貫松と稱するは此老松の下、其一望價千貫に値ると云ひ、此松亦三浦五木のひと稱して、松其れ自身も亦千貫景中の物なり、腰掛松は源頼朝も此松幹に憩ひ三浦の絶景を賞し

たりと此近傍に頼朝遊館を置きし跡あり今礎石を存す
前面の名島には清泉湧出し盛夏も枯れず鐘摺は大多和義久の館を置
きし處森戸明神は頼朝豆州三島明神の分靈を安置せる處其飛混柏と
稱するは三島より飛び來れりと傳ふ社に院宣三通運慶作の猿田彦の
面横笛小鼓の胴阿古力作駒の角二本を藏す葉山は古より三ヶ浦八景
と稱して吟詠乏しからず(一)森戸晴嵐(二)普門夕照(三)光徳晚鐘(四)峰臺暮
雪(五)守山夜雨(六)突渡秋月(七)心無歸帆(八)名島落鴈以上を三ヶ浦八景と
云ふ慶増院には觀音像運慶作心無觀音慧心僧都の作を藏せり
逗子の西方は丘陵を以て限らる丘西の一村を小壺と云ふ其濱海は即
ち鷺浦なり逗子より此丘陵を越すを廣尾坂とす頼朝鎌倉より數々此
地に遊ひ漁民の引網を賞覽す或時村民茶壺を献す頼朝此壺を此坂上
にて披露す故に此坂を披露坂(後披露坂を廣尾坂と改む)と稱し村を

小壺と改む頼朝大に悦び長く漁民の網税を免す村民擧つて網曳の戯
をなして頼朝の觀覽に供す頼朝即ち
地引曳霞の中の櫻鯛小壺の濱の春の朝風
正治二年九月二日將軍頼家小壺の鷺浦を逍遙し又船を舩して海上に
遊ぶ小林の朝夷義秀固より水練の名あり頼家命して游泳せしむ義秀
直に海中に躍り入り波浪の中に沈んで見へざると少時衆皆之を危む
既にして義秀大鯨三尾を提げ船側に現はる頼家大に之を壯とし其騎
せし駿馬を賞與せんとす是より先き義秀の兄常盛常に其馬を頼家に
請ふて與へられず是に於て常盛頼家に請ふて曰く臣水練は家弟に及
ばずと雖ども力を較ぶる時は必ず勝を制すべし請ふ其馬を賭して勝
負を決せしめよと頼家笑て之を諾し船を鷺浦に留め小坂の太郎光頼
か館庭今に其館跡を存すに於て相撲はしむ兩雄相下らず大地爲に震

ふ、人以て壯觀となす、終に相綏せしむ、常盛衣冠を着くる、逸なく裸體の儘電光火石の如く、彼の駿馬に跨り鞭を揚げて逐電す(東鏡)と傳ふるものは、即ち此地なり。

抑々三浦半島は伊豆半島と房總半島との中間に突出せる半島にして、地勢は其西北部なる大山山麓より連り其間に馬入河の洪涵地を隔つ其東方は陥りて浦賀海峽をなせども、地脈は此の狭き水道を隔て、房總半島に亘り、岩質岩層及走向共略々同一様形式をなせり、此小半島は東京灣と相模洋との中間に陥落の餘片の横はるものにして、大山附近及房總半島と其發育期を同ふせり、逗子附近三浦半島の地質は、曾て博士鈴木氏の踏査によりて大に明瞭となれり、即ち此地盤は地質時代より言へば最も新成の地質にして、其丘陵地は洪積層を以て成り、海濱地は現に發育しつゝある沖積層なり、故に三浦半島は到る處堅硬の岩石は

甚だ缺亡せり、三浦半島を組成する第三紀層の岩石は、火山屑碎岩及凝灰岩の二類より成り、火山屑碎岩は第三紀層の大部分を構成せる岩石にして、總て火山噴起の際噴出したる火山灰、岩塊、火山礫等の累々相重積して凝固せしものなり、而して凝灰岩は火山灰の凝固せしものより成れば、其質較々緻密にして俗に灰石と稱するものなり、鎌倉の諸丘陵より逗子の北部に起伏する丘陵は多く此凝灰岩なり、又逗子と小壺との間に突出する小坪崎を組織する斑紋を呈せる岩石は、安山岩及凝灰岩の碎塊の凝結せし岩にして、是れは凝灰角礫岩の名あり、又櫻山の東部の如く凝灰角礫岩に多量の輕石を混するものは、輕石角礫岩と稱し、火山礫輕石、安山岩等の岩片より凝結して砂岩状をなすものあり、之を火山質砂岩と稱す、以上の如く此半島を構造する地質に火山作用を経たる岩石の露出多きものは、富士、箱根、天城等の諸火山に近く、其噴火の

際此等の噴火孔より飛散せしもの此地に堆積したるものならん鎌倉より三浦半島に亘りて露出せる以上第三紀層は層向北々西より南南東若くは北西より南東に亘る故に海岸の出入も亦此方向に従ふ即ち由井ヶ濱の浸入小坪崎の突出若くは多古江濱及三ヶ浦の灣入大崩崎の突出又蘆名灣の浸入荒井城山長鶴諸崎の突出の如き皆然らざるはなし是れ濤波絶へず此の層向に並行して激衝し岩石を洗削するを以て其堅硬なるものは殘留して岬角となり其軟弱にして海波に堪へざる處は浸蝕せられて灣となれるものなり

岩層の傾斜は東北東若くは北々東に向ひ十五度乃至三十度斜下す故に其傾斜は頗る緩なれとも往々五十度以上の急斜を現はす處あり又稍々南して三崎地方に至れば層向西より東するもの多く地層灣曲して北方若くは南方に傾斜し處によりては背斜層を爲せり半島の東南

角なる劔崎は正に此背斜層を爲す所にして其背斜層上に燈臺を建設したり

三浦半島は第三紀層を以て地幣となすか故に高度著しき山岳なく皆丘陵狀をなし其四近に第四紀の洪積層若くは沖積層の發育せるを見る第三紀層の最高點は半島の中點なる大楠山なれとも八百尺に越へず次に二子山(二百三十六尺)富山(六百三十六尺)武山(六百六十尺)等なり此の如く岡阜起伏して互に眺望を遮らざるものは亦三浦風景の他に勝る所以ならん乎

三浦半島附近の第三紀層には所々に地變力作用によりて斷層を生ずる所あり然れども長く亘るもの少く多くは一小部の小斷層に止まり地層に參差を呈する所多し横須賀にある斷層は今造船所として其用著しく鎌倉極樂寺の斷層も較々著し江の島の岩窟は斷層の裂線に沿

ひ穿てる洞穴なるとは鈴木博士が明めたる所にして、古今遊人の一奇地として觀る所なり。

第三紀層の岩石中には化石を埋藏すると夥し、而して其化石は多く貝類にして此岩層の水底にありし時生活せし動物の遺骸なり、逗子附近にては上宮田村邊に最も多し老龍庵に藏めらるゝ化石は櫻山別荘の堀井を穿たるゝ時採集せられしものなり。

洪積層は現今丘阜状を成す地にして、地質系統の第四紀の古期に屬し、前陳の第三紀層の丘陵よりは一層平夷にして往昔の海濱又は河床に堆積せし地層なり、其岩石は塩埴砂、粘土、火山灰、礫、火山礫等より成れり、三浦半島に於ては洪積層の露出廣からず、浦賀附近の丘陵及半島南端の高圓坊の丘阜之に屬す。

沖積層は現今發育しつゝある最新の地層にして、地質系統の第四紀新

期に屬し、海濱の低地に堆積する粘土、砂地及河流の流域に發育する沃地等即ち是なり、三浦半島に於ては逗子、多古江流域の平地及蘆名灣邊の平地を以て最も廣き沖積層とす、此地層は現時の生産地にして最も重要な地とす。

三浦半島は以上の如く總て地質系統中新期の地層を以て構造するに拘らず、半島中只厩に二小點に地球内部より迸出せし古岩あり、上山口及平作の二村に蛇紋岩の露出あり、其周圍は第三紀岩層を以て覆はれ、其區域極めて狹隘なり、蛇紋岩は溫石と別稱し、其色濃黒綠、若くは血紅綠の脈條を通し、雜色を帯び、或は綠黃の斑紋ありて、金屬光を放てる纖維狀の鑛石を基散す、概して岩理蛇背の斑紋に類するを以て蛇紋岩の名あり、其質堅實にして稍々硬く彫刻すべく、又研磨すれば美麗の光澤を發する石材なれども、岩石に龜裂多く霏爛崩壊し易きを以て其需用

廣からず。

大魚する相模の海の夕なさに

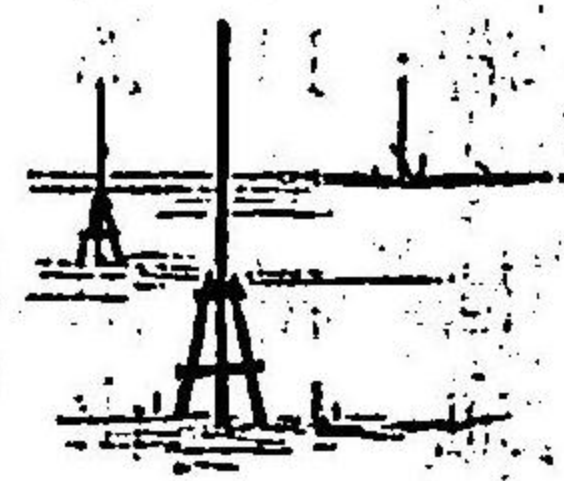
みたれて出るあま小舟かゝる

江の島やちかひ涼しき磯さには

守神なくは波のこゆらん

あらためていかに枕を由比の濱

春よりたかき波の音かな



青年の夏季登山

凡○を○青○年○の○士○氣○を○鼓○舞○し○抱○負○遠○大○の○氣○象○を○養○成○す○べき○もの○は○高○山○攀○躋○の○利○に○若○く○も○の○な○か○る○べし○若○し○夫○れ○莫○逆○の○學○友○兩○三○相○携○へ○て○都○市○の○熱○鬧○を○距○り○田○圃○の○間○を○徑○し○て○幽○谿○に○入○り○手○に○清○泉○を○掬○し○て○苔○石○に○踞○せ○ん○か○松○籟○は○頻○りに○琴○音○を○弄○し○て○遠○來○の○客○を○慰○む○べし○再○び○森○林○を○穿○ち○て○鳥○逕○を○迎○れ○ば○泉○聲○幽○かに○耳○朶○を○掠○め○來○る○が○如○き○は○到○底○冲○積○土○裏○の○低○地○に○醜○陋○し○つゝ○あ○る○者○の○味○ひ○得○さ○る○興○味○な○り○更○に○進○め○ば○地○益○々○傾○斜○の○度○を○増○し○路○も○亦○次第○に○峻○峻○と○な○れ○ば○低○原○地○方○に○於○て○常○に○見○慣○れ○た○る○圓○滑○俗○化○の○頑○石○は○次第○に○其○跡○を○隠○く○し○て○圭○角○稜○々○た○る○巉○巖○は○磊○落○と○し○て○徑○の○兩○側○に○整○列○し○て○恰○も○そ○が○姿○勢○を○正○し○て○嚴○格○に○我○行○を○迎○ふ○る○が○如○き○に○逢○へ○ば○如何○に○我○が○氣○韻○を○高○雅○に○せ○さ○る○べ○か○ら○さ○る

を覺ゆるよ。既にして溪澗を過ぎ、て森林を出つれば、海面の高距頗る加はりしにや、氣温漸く寒冷を覺へ、空氣亦漸く稀薄となり、一步一喘喘々聲あり、是に於て將に來らんとする世路の難は、此峻阪の難に陪蓰するの實驗ともなるべし、先きに進める友は、後なる友を勵まし、後途にある友は、先驅の友の危険を警め、相呼び相應じ互に扶け助けられて、此困難に打ち勝ち、て、やがて目的とせる頂上點に達すれば、眼界忽ち開けて、一望涯際なく、遠近の群峰は兒孫の如く脚下に集まり、田野の遠く開展せるは恰かも、緑色の金巾を敷けるに異ならず、河流の蜿蜒として此間を走り、海に朝するは一條の銀綫に似たり、又湛へる湖水は鏡面の如く、點々の集落は、島嶼の如きを見ん、此時の愉快——氣宇——抱負——眼識等は如何、總ての心意は鼓舞作興せられて、天地の如何に廣大なるを感ずるよ、——天然力の

如何に壯大なるを覺ゆるよ、——自然の如何に秀美なるを知らるよ、——而して同時に又人事の如何に些少なるを解するよ、——人力の如何に微弱なるを感ずるよ、——俗界の如何に不潔なるを了せらるよ、——凡そ吾人が始めて下層の塵界より其頭を離れて、天然と握手し、天然と語るべきは、此一時にあるを以て、始めて眞に自然界を知らんとし、又自然界を究めんとするの念慮も亦愈々深且つ切なるを覺ゆべし、嗚呼、青年の風氣を鍊磨し、精神を修養するは實に峻嶽に攀ち、高峰を踏むの氣風を馴致するに若くはなかるべし。
日本人は從來廉潔を以て稱せられ、雄壯を以て知られ、又義氣を以て讃せらる、此等の氣風は予は我が日本が山國なるに負ふ所甚た少からざるを知る、夫れ平原は富の集まる所、優勝劣敗の劇しき所、而して又總ての不潔の集まる所、總ての罪惡の犯さるゝ場屋なり、是を以て平原國は

富の程度は高からん、然れども住氏の氣風は卑し、平原國は物質的發達は盛ならん、然れども精神界は墮落せり、由來神仙は山中にありと傳へ高山大澤の間能く俊傑を出すと云ひ、又歐洲の文明は獨逸の森林中より出つと云ふが如きも、決し其故なきにあらず。

言ふまでもなく我國は有名なる山國にして、國中到る處山岳充斥し、國土其物が即ち崑崙樺太兩山系の太平洋の波間に其頂上を擡げたるものにして、國全體が乃ち山なり、加ふるに其峽間を破りて迸發したる火山は到る處に秀美なる倒扇狀の峻峯を築き、其數二百七十座の多きに及び、火山岩の掩ふ處は全面積の約五分の一に及び、されば登臨を試むべき邱陵、高山、古成層山、花崗岩山、火山等其擇むがまゝに吾人の前に屹立して撰擇を待てり、我國は實に登山至適の國と謂ふべし。茲に又青年有爲の士に向つて登山に最好機會を與ふるものあり、何ぞ

や避暑の休課是なり、夫れ登山は夏期を以て最好時とす、高山は氣温低を以て他の期節の攀登に堪へず、著名の高山は大概六月中旬より七月上旬に至る間を以て「山開き」と稱して始めて登山し得べく、恰も學生夏休の期間なり、此の登山好期節に於て此の悠々閑適の夏休あり、蝸屋に盤伏して暑熱を啣ちながら、不健全なる小冊子を嗜讀し、或は解體放逸して午睡を貪り、あたふた數句の好閑を碌々に過さんよりは、寧ろ三寸の草鞋に三尺の輕笥を携へ、健脚を火山の岩角に試み、神心を千仞の雲間に修養するに何れぞや、我日本健兒は何ぞ奮つて此の好機會を利用せざる。

我國攀登すべき名山高岳乏しからず、各地に於て人々の擇むがまゝなり、然れども同じく登らば成るべく、著名の高山を擇み、又其山に就き豫て觀察すべき材料を供ふべし、數多の高山一々之を詳細に紹介し難し

と雖ども、左に概略を紹介すべし。

富士山

是れ第一に攀登せざるべからざる名山なり、日本男兒として此芙蓉山下に生を享け、繪に於て寫眞に於て將た實物によりて朝に夕に其高潔の姿勢を望みて冥々の裏大感化を受けつゝある、此巨大なる師範を徳とするものは、一回は必ず登山せざるべからず、此山の自然的解釋及人事的影響は、本書の第一編に記せるを以て、茲には少しく登山の注意となるべき項を數すべし。

開山 富士山は例年陰曆六月一日(陽曆七月五日)を以て山開きとし是より登山の期と定む登山者の最も多きは七月二十日乃至八月中旬頃までとす。

登山路 登山の路五條あり(一)大宮口、是れ表口或は西口、村山口等と稱す。

し、東海道筋よりする者は鈴川に下乗し、大宮町(此間三里)に至る、途中曾我兄弟の墓、表富士の眺あり、大宮町に富士の本社なる富士淺間神社(官幣大社あり)、是より太郎坊に出て山毛マウ樺の深林中を過ぎて、三合目に達すれば、火山屑簇集して寸青の眼を遮るなり、頂上を仰視しべく初めて遠望の富士と其姿容を異にするに驚くべし、五合以上は熔岩流の跡を踏み八合よりは胸突八町の嶮を過ぎて頂上に達す、大宮より六里と稱す、(二)御殿場口或は東口又は新道と稱す、此路は東京其他東より登山する者の最便なる路なれば、登山者は多く此路による、御殿場に下車し、瀧河原及馬返しを経て、太郎坊に至る、二合目以上は火山砂滿地に布き、頂點まで一望目を遮るものなく、魚貫して登る、恰も砂漠旅行の如し、六合目の上には延曆十九年に甲州猿橋まで走れる熔岩流の遺跡を踏み、八合目に重力作用によりて山形の中心に陥入せる『太ナルミ』の峻坂及胸突八

町の嶮を過ぎて、駒ヶ岳の鐵梯を攀ちて淺間奥宮前に出つべし、御殿場より八里と云ふ(三)須走口、御殿場より鐵道馬車にて西北に走れば、三里餘にて須走村に達す、是より籠坂峠山中湖附近を過ぎ、吉田に出て、松林中を経て太郎坊に達す、其他御殿場口に異ならず、(四)吉田口、甲州路より登る道にして彼の延暦年間の熔岩流を辿りて登る路なり、即ち猿橋より大目を経て谷村に至り、吉田に出づ、是より七里にして布近に富士八湖の山中、河口の諸湖を俯望すべく、特に御坂嶺を越す時は、富岳河口湖面に倒影して、富士見三景の一と稱せらる、(五)須山口、佐野驛より須山村を経て登る路なれども、今は登山者殆ど絶ゆ。

次は山脈の順序に従ひ、崑崙山系の西南部より隣攀すべき諸名山を略記すべし。

霧島山

霧島火山脈の主山にして東西の兩峰に分れ、東嶽は大隅國始良郡東襲山村に峙つ、是れ即ち高千穂峰にして海拔一千五百四十四米あり、此峰は有名なる活火山にして、御鉢と稱する噴火孔より盛に噴煙せり、其噴火は間歇的にして、時々大噴火あるを以て危険なれども、其景實に勇壯なり、西嶽は韓國岳にして一千七百六十二米を抜く、山腹に舊火孔あり、大浪池と稱す、周圍二里あり、其西に鉢立山あり、頂上に所謂天の逆鉢を奉す、霧島の西麓に官幣大社霧島神社を祀る、皇國開祖の諸神を奉祀する莊嚴の古社なり。

開開岳

薩南に屹山する一名山にして、霧島帯に屬する火山なり、高度九百二十七米、其形の似たるを以て薩摩富士の名あり、其脈野間岬となりて突出し、風景の美なる多く見ざる所なり。

櫻島御岳

鹿兒島灣に突兀たるものは是れ御岳なり、海拔一千百四十三米にして霧島火山脈に屬する火山なり、南北の兩岳に分れ中間に御鉢と稱する噴火孔を有し、今尙ほ硫煙を吐く活火山なり、登臨すれば鹿兒島灣眼下に湛へ、日薩隅の諸山一眸に集まり眺望頗る爽快なり。

祖母山

日肥豊三國の境上峙てる阿蘇火山脈に屬する火山にして、海拔一千九百三十五米、突實に九州の最高點なり、是より山脈天孫降臨と傳ふる高千穂庄に連り山彙甚だ深し。

阿蘇山

阿蘇火山脈の盟主にして、噴煙活潑の活火山なり、其高度は一千六百九十米なれども、火山規模の大なるは世界に稀なるものにして、舊火孔の

大さは東西の直徑六里南北四里に及べり、内に數萬の生靈を住ましむ、又舊火孔内より五個の火口丘を噴起せる狀は一回は必ず見るべき價値あり、『阿蘇山の中よりいつる白川の、いかて知らせん深き心を』

由布岳

豊後の名山にして、富士の名あり、阿蘇火山脈に屬する火山なり、海拔一千六百八十二米にして、是より鶴見岳の火山及國東半島の二天子山火山に連れり、『由布の山夕日かくる、時にたに、わかれし今日を思ひいてなむ』

英彦山

豊前の西部に峙てる名山にして、『彦山高處望氛氳、木末樓臺晴始分、日暮天壇人去盡、香煙散作數峯雲』の句は以て此山を彷彿の裏に認め得べし、海拔千二百四十四米を有する阿蘇火山脈中の火山なり、有名なる耶馬溪は此火山岩の續きにして、水蝕作用によりて奇峯怪嶺を作れり。

温泉岳

肥前の島原半島に其座を占むる活火山にして、阿蘇火山脈に屬し、海拔一千四百八十八米、中腹に温泉あり、是より連る多良岳も海拔一千二百二十三尺を有する火山なり。

劍山及石槌山

劍山は阿波の西部に聳ゆる四國山系中の古生層の高山にして、海拔二千二百四十二米、實に四國第一の高峯なり、其西方に聳ゆる石槌山とす、四國山系中の粒狀安山岩より成る、海拔二千〇九十七米の高山にして、四國に於て劍山に亞ぐ、實に南海の双峯なり、劍山の頂上には寶藏石太郎、笈次郎、笈及不動石等の奇岩あり。

中國諸峯

中國の諸山は概ね花崗岩を以て成り、山勢豪宕なれども著しき高峻の

頂點なし、備後の猿政山は中國山系中の最高點にして、海拔一千四百十七米なり、之に次ぐを安藝の寂地山とす、高度一千三百五十七米あり、最も著名なるは備中の御神山なり、神仙の棲所など、傳へ帝釋洞門神橋等の奇岩あり。大山及三瓶山は伯耆に聳ゆる中國第一の高峯にして、高度一千八百七十七米、白山火山脈に屬する有名の休火山にして、之より連る三瓶山も同脈に屬する、海拔一千二百二十七米の熄火山なり。

比叡及比良山

近畿地方に著名なるを比叡及比良とす、比叡山は京都の北方に屹立する、直立八百二十三米の古生層の山にして、夏期は外國人等は山中に天幕避暑を試みる者あり、之れに近き愛宕山は古生層にして、九百十三米の

高度を有す琵琶湖の北邊に屹立するは比良山にして一千二百三十六米の花崗岩なり。頂點よりは琵琶湖の風光を一望すべく湖畔の八景一眸の下に集るべし。筋礫一發水雲間、座定船窓客意閑、歷々名區供指點、雪崩半角比良山』

金剛山及生駒山
 金剛山は有名なる千早城址の在る所にして山質は地皮の最下部を組織する片麻岩系より成り、海拔一千二百二十七米あり、河内國南河内郡の森屋村より三里三十二町にして千早村に至る、又二十八町にして山頂に達すべし、千早の城址は其山腹に在り、葛城山に連れり、其遙北方に生駒山あり、同じく片麻岩系の山にして、直立六百四十七米あり。

伊吹山
『彦根路のたむけ越れば神風の
 伊吹高峰に雲非たつ見ゆ』

近江の湖東に聳ゆる近江第一の高峯にして古生層の石灰岩より成れ

り海拔一千三百七十一米あり、頗る本草に富む、登臨甚だ佳なり。

惠那山
 美濃惠那郡信濃境にある直立二千二百四十米の花崗岩にして、山麓は樹木の發生頗る盛にして、伐木丁々和鳥聲の雅趣あり。

樺太山系に屬する山岳は崑崙系に比すれば甚だ高峻なるもの多し、特に高火山は本山系の特有にして一萬尺内外のもの多し。

北海道諸山
 北海道の中央に舊火成岩の石狩岳二千三十五米に聳へ、其北に『ヌタクカムウシユベ』火山あり、是れ北海道の最高點にして二千二百八十五米あり、其南に『オプタテシケ』火山あり、其他十勝岳(二八一二米)、天鹽岳(一五九〇米)等の高峯あり。

岩木山

津輕地方の名山にして鳥海火山脈の北端の高火山なり、海拔一千五百八十八米あり此山は本年六月廿日に噴煙盛に起り踏査の爲め登山するものありとの警報に彼のマルチニツク島の慘狀を耳せる即下なるを以て一恐懼を惹きしが後に山火事なりじこと、知れ一笑に附せられたり『富士見すは富士とやいわん陸奥の岩木のたけをそれとなかめん』

八甲田山

陸奥の中央に聳ゆる高さ二千五百七十一米の火山なり其麓の田代村附近は本年一月青森の第五聯隊の雪中行軍の大慘事を演ぜし場所にして其慘跡を弔ひて當時の慘狀を追憶して斯る奇變に處する臨機の策を回らすも可ならん

岩手山或は岩鷲山

那須火山脈中形容頗る美なる噴火山にして南部富士の稱あり、海拔二

千七十米あり頂上に噴火孔を存す最近の噴火は貞享年間にあり盛岡市を距る九里にあり途中柳澤馬返を経て嶮阪二里半にして頂點に達すべし『時知らぬこゝも雪あり奥の富士』

那須山

那須山火脈の主山にして又最も雄壯なる活火山なり此一群中に十八座の火山あり、那須の本山は三本鎗、南月山、茶臼山の三峯より成り茶臼山の頂上には面積八方^{キロメートル}の噴火口を有し、其中に又直徑二十間に十五間の二噴火孔より盛に噴煙せり其他硫氣噴洞は數多あり此山は曾て破裂して熔岩を流し砂灰を降らせしと數々あり最近の大噴火は明治十四年七月一日にして焼石灰石を雨らせり、斯の如くして彼の有名なる那須野を爲せり又著名なる殺生石は那須村湯本に在り『下野や那須野にしげさ篠をとりてあづま男は矢にそはくなる』

磐梯山及吾妻山

是れ會津附近著名の高火山なり磐梯山は明治二十年七月に爆裂したる活火山にして海拔一千九百六十四米あり會津第一の高山なり吾妻山は明治二十五年に爆發して三浦技師を斃せり高度は一千九百十九米あり此兩火山に就きては紀事頗る富めり。

日光山

日光山は觀光の勝地として避暑の好地として遊人頗る多く其景況は偏ぬく世に紹介せらる其男體山は日光山麓の群峯を抜く高山にして海拔二千四百八十三米あり實に那須火山脈中の最高點なり頂上に舊噴火孔を有す是より白根山の活火山(二千二百八十六米)及赤蘆山、鬼怒山等二千米以上の火山に連る。

赤城山、榛名山、妙義山、鼎狀山

上野に聳立する三火山にして赤城山最も高く一千八百九十三米あり榛名之に次ぎ一千四百五十七米あり何れも登臨すべき價值あり妙義は山高からざれども火山岩の水蝕を経たる奇景は或は石洞門となり或は矗立の危崖となり其風景は世に知らるゝ所なり。

鳥海山

羽州第一の名山にして海拔二千二百二十三米あり東北より望めは其形容完全の金字形にして頂上雪を戴くを以て富士に異ならず頂上に二箇の噴火孔を有す其噴火は貞觀三年にして其後も小噴烟はありしも今は休憩せり頂上に大物忌神社を祀る登山口は矢島口、吹浦口、蕨岡口の三路あり頂上まで六里にして達すべし。

淺間山

本州中部の大火山にして海拔二千四百八十米あり其噴烟の活潑なる

は阿蘇に次ぐべきものにして頂上には湯釜と稱する直徑約六百六十尺の噴火口あり然とも其昔は今より數倍の大火口なりしことは遺跡に徴して知るべし即ち現に舊火口壁の一片を存するものは前掛山なる一峰あり尙ほ牙山あり是も舊火口壁の一部なり此山は有史以來數數大噴火をなし白鳳年間より本年に至る一千二百十七年間に三十一回の大噴火あり其遺跡は登臨して實驗し得べし登山口は沓掛口追分口及小諸口の三方より登り得べし

『富士のぬの神の名にさく淺間山烟くらへや末もあくれぬ』

以上列舉せる諸山は本邦の高山及名山の中主なるものを示せるものなり我が山國の限りなきの高山名岳を限るあるの紙を以て紹介せんことは許す所にあらず讀者は幸に以上列舉の名山及び之に準する諸山の近きものを選びて攀登を試み其聞見と研究との結果は紀行とし

て同好の士に示さば其益する所孤ならざるべし。

山路梯

『岩たみ登りわつらふ峰ついき』

道全法師

雲にはつれて見ゆるかげはし』

海 山

『うみ山の思ひやられしはるけみ』

同 人

ふれはちみきみのにそちりける』



日本の最寒地

我國は東部亞細亞の溫暖地なれども、世界同緯度地の寒地なり、南は臺灣より北は北海道に至るまで緯度二十九度間を亘るを以て、地に隨ひて寒暖固より一ならずと雖とも、而かも我國の暑氣は極南も極北も甚しき懸隔なく、臺灣極南と雖とも未だ三十七度を超へたることなし、即ち現今までの實測によれば、臺灣の絶對最高温は明治三十年七月二十四日臺南に於ける三十六度九之に亞ぎて臺北の三十六度五、恒春の三十三度四等なり、是を以て明治二十六年七月廿六日熊本に現はれたる三十八度三、及同年同月廿五日岐阜に於ける三十八度二、二十七年八月廿六日宮崎に於て三十七度七、十九年八月十九日廣島に於ける三十七度五等却て遙に高温なり、而して北海道各地に於ても三十五度、三十七

七年八月七日十勝に於て三十六度に昇りしことあれば、我國夏期の暑氣は全國を通じて格段の大差なきものなり。然るに冬期に至りては其差頗る著大にして、極南と極北とに於ては五十度以上の差あり、是れ全く冬期我北部地方の烈寒を現はすを以て此の懸隔を生ずるに至るものなり、則ち冬期北海道内地の寒氣は頗る烈しく、毎冬氷點下三十度以下に降るを常とす、特に上川測候所(百狩國上川郡旭川市街)は本邦測候所中の最低温を測り得る地なり、此地は殆ど北海道の中心に位し、其海岸までの距離は北に百五十軒、東に百二十軒、南に百七十軒、西に八十軒の内地にあり、故に冬期は驚くべき烈寒を現はし、明治三十三年二月十六日には氷點下三十八度三に降り、本邦未曾有の低温なりと稱したりしが、明治三十五年一月二十五日には尙一層の烈寒を示し、遂に氷點下四十一度に降り、是れ甚た珍しき現象なり。

抑々世界の最寒地は西伯利内地のペルコイヤンスク(Verkhoyansk)にして氷點下五十四度にして其地の緯度は北緯六十七度那威の北部に等しに位し、北極までば尙ほ遠き此地に最寒地ありとて世界に隠れなき事實なるに、我が上川の位置は厘に北緯四十三度四十七分にして、歐洲にては佛國の南海岸なる馬耳塞、伊太利の中部等にして溫暖の地として、正に避寒の場所なるに引き換へ、氷點下四十一度の列寒を現はし、世界の最寒地との最低温度の差厘に十三度とは實に驚き、寒地と謂ふべし、余は此の稀有の現象を生ずるや、直に書を上川測候所長梶沼氏に馳せて此稀有なる現象に就き報せられんことを求めたるに、氏は直に詳細なる左の如き返書を寄せられたり、記して以て最寒地烈寒時の一斑を示さんとす。

明治三十五年一月二十五日に現はれたる

最低温度に就て

天 氣	積 雪 十午前	最 多 風 位	平 均 風 力	平 均 濕 度	平 均 氣 壓	地 温 (最低)	平 均 氣 温	一 月 二 十 四 日	一 月 二 十 五 日
始と終日降雪午後三時三十分止む雨 後晴れ午後六時より快晴同十時霜を 結ぶ此日降雪深さ五糎五あり	六十三糎	北(時最强午前十時) (時北五米三)	二・三(二十四時間平均) (均毎秒の米)	九七・五(%)	七四六・一(氷點) (更正)七五七・四(海面及重 力更正)	(一)三九・二(時午後十時) (時観測)	(一)二二・六(六回平均)	一月二十四日	一月二十五日
前夜より引續き晴天の處午前二時三十分頃より漸次曇り出て同三時霜を過り降雪終日止まらず此日降雪の深さ四糎二あり	六十三糎	静穩(時最强午前八時)	〇・六(二十四時間平均) (均毎秒の米)	九八・八(%)	七四九・一(氷點) (更正)七六〇・六(海面及重 力更正)	(一)四六・一(時午前二時) (時観測)	(一)二六・七(六回平均)	一月二十五日	一月二十五日

最低温に達せし時の現象 最低温即ち氷點下四十一度に達したるは二十五日午前一時乃至二時の間ならん此際の模様を摘叙せんに室内點燈の石油は氷結し殆んど固体と變ずるに従ひ燈火の光力漸次薄弱となり午前一時稍々過ぎ終に消滅したり火氣なき室にありし置時計は二十四日夜半十二時に運轉休止し室内稍々温氣ある方の掛時計は午前六時運轉休止せり但し匣中の『コロノメートル』及銀側懐中時計の運轉には何等の故障を認めざりし

液体の總ては殆ど凍結固体と變じたり即ち清酒醬油麥酒酢等皆然り特に麥酒(火氣なき場所)は大概破壊せられたり又前夜七升入銅製藥罐飯炊釜に満たしある水は氷結し益々強固となり更に膨脹に傾かんとするや壞裂の異響を發し表面に縦横の龜裂を生じたり此際炬燵を擁して臥したるに空氣に觸れある頭部は恰も氷塊にて擽しつゝあ

る如く又は剃刀にて肌膚を殺がるゝ如く氷冷を感じ且つ露出せる耳朶の如きは癩痺し到底睡眠すること能はざるを以て遂に頭部を頭巾若くは毛布にて掩ひ置かに睡ることを得たり故に衣衾の襟に氷角を生ぜしは更なり其周邊に懸垂しある衣類或は戸障子天井等には一面氷角を生じて白色となり殆ど野外にあるの思ありし夜明け之を掃へども容易に脱却せず終に盛燃のストーブの傍にて乾燥消却したり尤も氷點下三十度に降れば室内に於て空氣に觸接したる物體には氷角を生ずるは通例とすれども今回の如く密附且つ強濃なりしは始めての顯象とす野外の積雪は凍結し其表面は閃々たる氷角と化し之を踏めばキユークの異響一層強く感じたり野外に佇立したるに身體は忽ち冷え酷烈極まる寒き空氣は襲來し又は口中に侵入し且つ鼻孔亦閉塞し呼吸非常に窘迫と爲り五分間も佇立することを得ざりし又氣

息は出づるに随ひ直に白乳色と變じ、己が眉毛衣襟等に霜を結べり、故に外氣に接觸したる鼻頭、唇、耳朶、手指は痲痺を起し、感覺を失するに至り。動物の働作に就き、其一二を述べんに、屋外の犬は終夜吠え廻りて、一所に止まらずして夜を明かし、又雞は足指凍り知感を失ひたる爲め、宿木より墜落したり、雞鳴も一二聽きたれども、例日の如くならざりし、雀鳥の如き常住鳥は毎朝飛行囁鳴するを例とすれども、此日(五時)は午前十時前後に至り初めて飛行を見たり、鼠は常に夜明前後まで屋内を荒れ廻はれども、是れ亦遂に其噪音を聞かざりし。當測候所の井水、井戸側の上端より水面まで曲尺一丈三尺、但し井側は高さ三尺は氷結して、厚さ曲尺二分の氷面をなしたり。

第十九世紀末の回顧

本編は元と明治三十二年即ち一千八百九十九年の起草に係り、第十九世紀を追懐し、紀念し以て來るべき新世紀に於ては如何に進歩發達すべきやを比較せんが爲めに記せしものなり、故に舊套に屬する所あるは免れずと雖ども、而かも世界列國が如何に地理的進歩をなしつゝあるかを觀るべきものにして、昨年英國に於て出版されし "Lest we Forget" A Keepsake from the Nineteenth Century. の如きも蓋し

同一意に出してしものなり。多望多囑を以て迎へられたる此の十九世紀も、先人の未だ曾て夢想にだも及ばざる大進歩、大飛躍をなして、今正に大混亂大紛擾の裏に終らんとす、將に來らんとする第二十世紀は如何、是れ世界十五億の同胞が

均しく多趣多味に考究すべき問題に屬す、兎に角世紀末に當りては必ず大亂ありとの諺は偶然か將た當然か、不思議にも世界の歴史は常に此説に加擔し、新世紀と共に世界地圖の變革が促さるることなし、本世紀も餘す所僅に二年、僅此二年の日子に於て世界の大勢は果して如何に歸着すべきや、現今世界暗潮の進勢は殆ど轉瞬も油斷すべからざるものあり、地圖上を彩とる國境線變遷の動機は亞細亞に、歐羅巴に、亞非利加に、濠州に、將た亞米利加に、世界到る處に、地球上何れの邊にも續々爆發して此一世紀間に經營し、觀察したる事業を短き世紀末に落着せしめんと急ぐかの如く視ゆる有様は、一年間の舊債を窮陽除夜に際して始末を附けんとし、或は債鬼となり、或は窮漢となり、混亂紛擾の間に一夜を過すものに似たり、取るも取らるゝも此一夕にあり、遣るも遣らぬも亦此一夜にあり、一年の繁忙多事除夜に若くなし、世界の大觀豈

に世紀末にあらざらんや、余は今世界各洲に就き聊か本世紀の下半來の情況を叙し、併せて其現況を記すべし、讀者請ふ先づ一葉の世界地圖を繕きて下文を讀め、

亞細亞洲

亞細亞は世界の祖國なり、印度支那波斯の如き既に幾千年の古昔に於て文華爛熳の域に達し、其餘芳を各洲に流がしたり、又本洲人の武威は曾て他の諸洲を震懾せしめたり、本洲古人の理想は凝りて佛教となり、基督教となり、回教となりて、世界無數人民の信奉を繋ぎたり、而して本洲現今の形勢は如何、世界三分の一を有する大陸土にして、其能く獨立する邦國は幾何ぞ、世界人口の過半數を有する大洲にして、其住民の境遇は如何、實に言ふに忍びざるに至れり、是れ抑々何に原因すべき歟、夕に汽船馬關を發すれば、一百二十哩程の朝鮮海峽は穩波夢を載せて

翌味爽には釜山埠頭に鎗を投ずるを得べし、是れ彼等が自稱する大韓
 帝國の地なり、試みに此國の四邊を視れば、北方には露西亞の版圖延び
 て其境に迫り、西境には支那老國の境域其基根を抱けり、而して東南
 は一衣帶水を隔て、我帝國の其前面を擁するあり、其形勢は恰も活路
 なき囊裏の物に似たり、而して其面積は僅に七萬七千方哩の一小國な
 り、其能く獨立の實を全ふせんには頗る國民の努力を要す、然れども幸
 に我國の扶助あり、僅に二十年前迄支那の附庸國として世界地圖の上
 清帝國と同一色に彩とられたる朝鮮が獨立國として世界に知られ、既
 に世界地圖上の一特色を占むるに至りし者は、實に我國首唱の賜なり、
 且つや明治二十七八年血を以て此國の獨立を擁護し、愈々自主國たる
 の面目を保たしめしものは、本世紀末に於ける日本帝國の義舉として、
 永く世界の記憶する所なるべし。

朝鮮半島を西に路して鴨綠江を渡れば、尨大の支那帝國に入るべし、其
 版圖四百二十二萬方哩と稱す、歐洲全土よりも遙に廣く、殆ど亞細亞全
 洲の三分の一を占む、而して其住民は實に四億一千萬に上る、此の大版
 圖此の大生靈を御するに唯一の獨裁皇帝あり、實に世界に於ける空前
 の大帝國にして古の波斯大帝國と雖ども、又羅馬大帝國と雖ども斯る
 廣大の實權を有せし、大帝王なし、露西亞は其版圖に無人の土地の廣袤
 に於ては、支那に一步を抽く、然れども其住民に被治者の頭數は支那の
 四分の一に過ぎず、故に支那今日の狀態は一人の力能く四百餘萬方哩
 の土地及四億餘萬の人民を治め得るや否の疑問中に在るものなり、疑
 問の集まる所競争の行はる處なり、故に本世紀下半に於て支那地圖
 上境界線の變改せし所頗る多し、先づ江寧條約に於て香港を英に割き、
 千八百六十年の露清條約によりて滿洲に於ける黑龍江並に烏蘇江以

北の地十數萬方哩を露に割き、英清條約によりて西藏の西端カラコルム山脈以南のカミシヤ地方凡そ三萬方哩を割きて英國保護の下に置きたり而して最近に於ては尙切りに境域變更の舉を進めつゝあり、即ち日清戦争後下の關係に於て我國に臺灣並に澎湖島を割き、爾來各強國より口を借入に藉れる割讓の要求は雨の如く繁く人をして支那分割と迄言はしむるに至れり、獨逸は先づ山東省の南部なる膠州灣及其附近の土地を借入れて其根據地とし、露國は清國帝都の門口にして渤海の關扉たる旅順口並に大連灣を借入れて其半扉を奪ひ、英國は其半扉たる威海衛を借入れたるを以て、こゝに帝都の關門は全く他國の手に落ち、次で佛國は南部雷州半島の要地を借入して之を占領し、英國は再び伊太利と連合して内地の鑛山、開拓權を得、尙又内地鐵道の布設權をも得たり、最近に於て英國は再び香港附近の海面及土地二萬方哩

を借入し、此内には九龍、ミルネ、灣、ランタオ、島等の要所をも含めり、又此程に至り、佛國は清國に向つて更に福州地方の土地をも要求せりと傳へらる、此の如き進勢なるを以て、支那版圖の未來は殆ど想像し易からず、亞細亞の多事は、マルコボロ氏東航即下より久しく世に喧傳せられ所、而しも其大半は業已に粗々落着に歸せしも、支那問題はより漸く開幕せられんとす、亞細亞の多事は、東洋より多事なるはなし、東洋の多事は、支那より多事なるはなかるべし。

近二十年前の地圖を緋かば、支那の南隣に二十萬方哩なる安南の一王國ありしを視るならん、而して今は盡く佛領となれり、抑々此地の佛領に屬せし由來を原ぬれば、前世紀の末に當りて安南國內に叛亂蜂起し國王並に太子を弑し、叛亂七年の長きに亘りて遂に鎮制すること能はず、漸く佛兵の援助によりて平定するを得たり、是に於て其報酬は忽ち

全國を失ふの源となり、佛國は瀾滄江下流の沃土を要求して割讓せしめ、其後佛國宣教師殺害事件より柴混^{サイコン}地方を占領し、漸次其領地を擴め、千八百八十三年の條約によりて、安南の南半部は佛國領地となり、次て清佛戦争後^{ウエ}條約によりて、東蒲塞は佛領となり、尙續て東京條約によりて、東京をも佛領となせしめて、以て佛國領地は西は瀾滄江を以て暹羅に境し、北は支那廣西省に接するに至る、其面積は恰も佛蘭西本國と同積の領地を亞細亞に有するに至れり。

佛領の西に接するを暹羅とす、即ち本洲中の獨立國にして、後來開發の望なきにあらず、其國王は賢明の聞へ高く、舊來の弊風を一洗して、歐米の新主義を輸入し、國を開いて、廣く各國と交際を求めんとし、曩にオングセ親王を我國に遣して、開國對外の順序及び文物進歩を視察せしめて、遂に我國と和親條約を締盟し、昨年春來は國王親ら歐洲に遊びて、其

文運發達の狀を視察する等、頻りに國運の進歩を企圖すと雖ども、西に佛國の領地を控へ、瀾滄江の一水を以て堡障となせども、佛國の勢力は次第に江の西岸に及び、千八百九十三年の條約によりて、瀾滄江に沿ふ西岸の地二十五軒は佛國に對し、自由獨立の地たることを承認したるが如き、又英國の領地は國の東境より北方を包み、馬來半島の南端は海峽殖民地として、英領に入り、國土正に英佛の間に介立して、其獨立甚だ困難なり。

暹羅の西に接するは英領緬甸^{ミョウ}なり、曾て二十八萬方哩を有する一王國なりき、而して其建國は凡二千四百年前にありて、其都城はイラワヂー河畔に於て既に繁昌し、國民は輕快にして勇敢に、國土は豊饒にして、產物多く、後印度に雄視せしが、王室内に腐敗し、官吏外に貪虐にして、法律制度其宜きを得ず、土人は酷薄なる政道に驅られて、漸次昔日の膽勇を

失ひて兇猛となり、實直の氣象變して猜疑となり、學術進まず工業振はず、漸く亡國の兆を現せり、加ふるに二百年來英人漸く海岸より侵入し葛藤斷へざりしが、遂に一千八百二十四年に至り英國は緬甸と開戦を宣布し、同五十二年迄に下緬甸の地を收めて英領とし、一千八百八十六年には國王デールポアの失政を鳴らし、緬甸遠征軍を起し一舉して其都城を陥落し、國王を擒にして之を廢し、王國全版圖を擧げて英國管理の下に置きしを以て、茲に緬甸なる一國を亞細亞洲中より除き去ることとなれり。

緬甸の西、ヒマラヤ山の南麓より遠く洋中に突出する三角形の一大半島を印度とす、カンヂス、インダスの二大河此土を潤し、氣候炎熱多濕に天産無盡藏と稱す、一百五十六萬方哩に亘る大沃土にして、此に二億八千萬の生靈を住ましめ、其豊饒は夙に世界に響き、其所有權は先天的に

早く既に歐洲人の手に落ちたるやの看ありて、太平洋と印度洋との直航路の開くるや、葡萄牙、和蘭、佛蘭西等の諸航海國皆此土を羨望し、競ふて其領有に歸せんを望み、其沿岸を占領して立脚地となせしも、後援續かざして止みしが、爰に此等の諸國に代りし新航海國は即ち英國にして、千六百年代より政府保護の下に東印度商會なるものを組織し、所所に貿易を營み甚だ勢力あり、此の社保護として衛兵を派遣し、遂に漸く内地の諸侯を征服し、印度主要の都は既に盡く其領土に收め、一千八百五十八年に至り商會は印度管理權を擧げて英國政府に譲りしを以て、茲に廣大の英領印度を見るに至り、現に鐵道二萬餘哩、電信四十六萬哩を有し、汽船は國の各港より何れの方角にも往來するが如き、印度土人の到底企て及ばざる所ならん、然れども英國施政に違からざる印度西部のアソリヂス種族は昨年來叛旗を英國に翻し、其の勢甚だ猖獗に

して、遠征の英兵も屢々不覺を取りしこともありし、印度獨立の初聲は
今世紀の末に於て世人の耳にせし所、今後此の聲の大となるべきや又
遂に口を箝むべきや、來世紀に小すべき件なりとす。

印度の西に隣るベルヂスタンも亦近今英領となりしを以て英領印度
は東に緬甸、西にベルヂスタンを拉して兩翼とせり、ベルヂスタンの北
に亞富汗あり、此地英清露の境域に立ち、其ハミールは英露の衝突點と
して久しく世間の注目點となりしが、ホンヅグーシ、ユ山の東南は英領
となり、アムダリヤ河以北は露領に入り、一段落を終りしも亞富汗の境
域は爲めに大に縮小せり。

亞富汗の西に接するは波斯、王國なり、此國上古に於て強大の帝國たり
しは古史の語る所なり、歷山王の爲め滅されてより以來は亦昔日の概
なく、回教兵に征せられ、成吉汗及帖木兒に蹂躪せられ、遂に亞富汗、ベル

ヂスタンの兩國には分離獨立せられ、版圖非常に縮小せしも、猶ほ獨立
を維持するを得る丈けは本洲に於ては一雄國と謂はざるを得ず、然れ
ども常に露國の爲めに其北境並に裏海方面を牽制せられ、波斯灣内の
要港ブーシールは英國に占められ、前門の狼、後門の虎、國歩頗る危し將
來世界の一大問題に上らざれば幸のみ。

波斯より西に進めば上古史に於て著名なる亞細亞、土耳其の地に入る
べし、此地は南にチグリス、ユーフレトの二大河を控へ、黒海と地中海と
の間を占め形勢凡ならず、氣候亦溫暖にして東部には樂園と稱せられ
たるメソポタミヤ平原あり、西部は小亞細亞の地にして、北部はアルメ
ニヤ、南部は則ちシリヤなり、此形勝の地曾て著しく繁榮せしが、羅馬に
征服せられて以後、一敗遂に起たず、回教の兵を破り、十字軍及韃靼兵に
苦められ、又歐洲にオスマン帝國起るに及び、其領土となれり、其南に横

はる亞刺比亞も主要の土地は土耳其の領に入り、亞丁及ソコトラ其他二三の島嶼は英國の領土に入れり。本洲北方一面の廣野は即ち西伯利亞にして、土地平遠に烏拉爾山以東一望涯なく、一物の堡障たるなく縦横自在兵馬の馳驅に任ず、是れ前世紀來露西亞克薩兵の鐵蹄によりて經營せる彼れが東藩たる大版圖なり、其廣袤四百八十三萬方哩と稱し、西端は歐洲に連りて、東端は太平洋彼岸に其首を擡げて北米大陸と相呼應せんとす、其内地は無邊の廣野、人の住む者稀なりと雖ども、東洋の此岸と西洋の彼岸とを連絡すべき鐵道開通の曉には、上海新嘉坡香港コロンボ亞丁乃至マルタ馬耳塞の繁榮を殺きて此の寂寞無人の曠野に連薨楸比の新都を建設するを見るに至るならん、况んや此野森林に富み、礦物に富むに於てをや、西伯利亞の西南に隣る中央亞細亞も亦一千八百八十三年來露國版圖に入りし

を以て、露國の領土は裏海濱より通して太平洋岸に達するに至れり。故に亞細亞現今の形勢は歐洲の勢力日に月に増殖しつゝありて、洲内に於て固有の體面を保つ所甚だ稀なり、試に之を統計すれば亞細亞全洲一千七百萬方哩の内、露國の領地は六百五十六萬方哩を占め、英國は一百九十六萬方哩を領し、土耳其は六十七萬方哩を有し、佛國は二十萬方哩を領するを以て、此の四國の亞細亞に有する領土を合算するとき、は九百三十九萬方哩にして即ち全洲の過半を占領せり、亞細亞の大勢も亦憫然と謂ふべし。

大洋洲

南洋の近事も又頗る多事と謂ふべし、曾て貿易風帶四時溫暖の裏に、長夜の眠を貪りし蠻民等が、西班牙、葡萄牙、和蘭の冒險家特に前世紀の下半に於て、英人クックの見舞に逢ふて、世に紹介せられて以來、忽ち歐洲

各○國○競○争○の○渦○中○に○投○ぜ○ら○れ○荷○も○未○占○領○の○地○あ○れ○ば○彈○丸○黑○子○の○小○島○と
 雖○ど○も○各○國○は○競○ふ○て○其○國○旗○を○翻○し○其○領○土○に○收○む○る○を○以○て○土○人○は○春○眠
 未○だ○覺○む○る○に○違○な○く○其○住○土○は○早○く○既○に○地○圖○上○に○於○て○他○の○領○土○に○歸○し
 此○身○此○儘○既○に○他○國○の○臣○民○と○な○り○了○る○の○狀○況○な○り○合○計○四○百○二○十○三○萬○方
 哩○の○諸○群○島○四○千○萬○の○人○口○今○餘○す○所○幾○何○も○な○し
 抑○々○本○洲○の○最○初○に○歐○洲○人○の○手○に○落○ち○し○は○一○千○五○百○六○十○八○年○西○班○牙○人
 の○比○律○賓○群○島○に○占○據○せ○し○を○以○て○嚆○矢○と○す○是○よ○り○先○大○膽○な○る○航○海○國○葡
 萄○牙○は○最○も○亞○細○亞○に○接○近○す○る○馬○來○群○島○を○發○見○し○た○れ○ど○も○其○占○領○の○實
 は○却○て○和○蘭○人○に○一○步○を○先○せ○ら○れ○千○六○百○四○年○和○蘭○は○既○に○ス○マ○ト○ラ○瓜○哇
 ボ○ル○ネ○オ○の○諸○島○を○占○領○せ○り○爾○來○歐○洲○の○諸○航○海○國○は○競○ふ○て○新○島○發○見○に
 従○事○し○其○間○に○烈○し○き○競○争○行○は○れ○た○れ○ど○も○最○も○勢○力○あ○り○し○は○西○班○牙○和
 蘭○英○吉○利○の○三○國○に○し○て○遂○に○經○緯○度○を○以○て○境○界○線○と○定○め○西○班○牙○は○赤○道

以○北○五○度○に○し○て○東○經○百○十○五○度○乃○至○百○六○十○五○度○の○間○に○連○亘○す○る○一○帶○を
 領○し○和○蘭○は○北○緯○五○度○以○南○南○緯○十○度○に○し○て○東○經○百○四○十○一○度○以○西○を○占○め
 英○國○は○其○利○最○も○大○に○即○ち○濠○洲○大○陸○及○其○附○近○の○諸○島○を○占○有○し○た○り
 其○後○諸○航○海○國○の○形○勢○一○變○し○先○輩○國○は○其○勢○力○既○に○桑○榆○に○屬○し○現○今○新○勢
 力○を○以○て○現○は○れ○し○は○獨○逸○佛○蘭○西○北○米○合○衆○國○等○に○し○て○獨○逸○は○新○に○屬○島
 を○得○ん○ど○し○て○其○進○勢○甚○だ○悽○む○く○佛○國○も○亦○益○々○領○土○を○擴○張○せ○ん○と○務○め
 米○國○亦○野○心○な○き○に○あ○ら○ざ○れ○ど○も○奈○何○せん○先○取○權○は○既○に○前○三○國○に○占○め
 ら○れ○た○れ○ば○此○等○の○新○航○海○國○は○東○經○百○四○十○度○乃○至○西○經○百○三○十○五○度○の○未
 占○領○地○を○占○有○せ○り○獨○り○英○人○は○依○然○太○平○洋○を○以○て○濠○洲○大○陸○の○湖○水○の○如
 く○看○做○し○諸○島○を○舉○げ○て○自○國○の○專○有○に○歸○せ○ん○こ○と○を○望○め○り
 英○領○濠○洲○は○約○三○百○萬○方○哩○を○有○す○る○大○陸○に○し○て○其○發○見○の○効○は○千○六○百○六
 年○始○め○て○和○蘭○人○の○東○岸○上○陸○に○歸○す○べし○爾○來○和○蘭○人○は○海○岸○地○方○を○探○檢

せしが、一千七百七十年英人クック東岸を踏査して之に新南威爾斯の名を命じ、一千七百八十八年英國より罪人を送りしが今世紀に入りて良民の移住者を生じ、千八百五十一年始めて有名なる大黄金の發見ありしより移民夥しく、現に三百五十萬の移民を住ましめ、四十萬以上の人口を有する。二大都會を建て、二千五百の官立學校に十五萬の生徒を養成し、九千萬頭の羊、五千四百萬弗の黄金、二千四百萬弗の銀、四百萬噸の石炭を産するに至れり。

比律賓は實に西班牙が昔日有せし海上權の紀念と謂ふべし、一千五百四十三年率先して此群島を占領し、國王比律布の名によりて本島に命ぜし以來、年を経る三百五十五年、恐らくは歐洲海外領地の最古のものならん、其間我日本人の之を争ふあり、土人の政令に不服なる者ありしと雖ども、能く今日まで之を維持したる紀念物、今日此際將に其手を離

るゝの止むを得ざるに至るを見る、聊か西班牙の爲めに氣の毒の情なきにあらざらん、然れども其政令の荒廢は久しく世に非難せられし所、土人の不満も亦久しく訴へし所、今日米國の打撃に遇ふて其手を離すは、寧ろ至當なり、今後の形勢果して如何、我新領地の南隣に意外の主人公移轉し來るべきか、抑々又珍らしくも南洋に一獨立國を見るに至るべき歟。

布哇は曾て大西洋以西唯一の君主國として珍重せられし所、間もなく民主國と豹變せり、次で南洋唯一の獨立國として珍重せられし所、然るに今又將に米國の一附庸と豹變し、併せて今世紀の最終に於て南洋唯一の獨立國を失はんとす、抑々此國は一千八百八十七年カラカワ王遠逝の後は、外國移住民の煽動より起る民間の物議常に絶へず、較もすれば革命に至らんとせしが、一千八百九十三年春に至り、愛國黨なる革命

派起り、布哇を以て合衆國に合併せんことを企てしも、米國政府の承認せざりしを以て翌年七月遂にリリオカラニ王を廢しドナル氏を推して大統領とし、君主國を改めて共和國となせり、爾來米國合併論者は斷へず運動を試み、米國も亦マツキンレー氏の大統領となりてよりは、以前の論鋒漸く變じ、最近に至つて米國々會に於て、愈々米布合併案通過したりと傳ふれば、早晚事實として現はれ、太平洋中又一獨立國なきに至るべし。

歐羅巴洲

歐洲は現世紀に於て世界に雄視し、地球上を我物顔に濶歩横行する國の集まる所、而かも其面積は三百八十二萬方哩にして、全洲を擧げて其廣さ支那一國に及ばず、其内に國する重もなる邦土十九あり、而して露西亞は一國を以て二百十萬方哩を占むるを以て、他の十八個國は一

百七十二萬方哩を共有せり、故に一國の平均面積は九萬五千方哩に過ぎず、されば十六萬一千方哩の我國を爰に置かば、歐洲の大國なり、斯の如く歐洲區畫の狭小に別たるものは、人事の營作、競逐の劇甚なりし、徵證として見るべし。

然れども現今の歐洲は各大洲に對しては、常に紛争の主動者となり、挑發者たりと雖とも、歐洲其地に於ては、比較的、平穩なり、是れ各國權力の平衡によれり、今世紀の下半に於て歐洲各國の境界線を變改せし著しき出來事を擧ぐれば、左の如し。

- (一) 一千八百六十二年サルチニヤ王の統一 — 伊太利の建國
- (二) 一千八百六十七年澳地利匈牙利の合同
- (三) 一千八百七十年普佛戰爭 — 普魯西の膨脹 — 佛國の縮小
- (四) 一千八百七十一年獨逸聯邦の同盟

(五)一千八百七十七年露土戰爭||土耳其の縮小||バルカン半島諸邦の分立

(六)一千八百九十七年土希戰爭

(一)伊太利の地は羅馬帝國の破滅と共に、幾多の小邦に分裂し、其後佛、普、澳の領地に歸せしことありしが、一千八百六十二年に至りサルヂニア王起りて遂に小邦を一統し、伊太利王國を建てたり、然れども此時までは尙澳國の所領及法王の領地を存せしが、一千八百七十二年に至り全く統一して十一萬四千方哩の今の伊太利なる王國を見るに至れり、(二)澳國を盟主として、匈國の合同によりて歐洲南部に二十四萬一千方哩の澳匈帝國を生じ、(三)普佛戰爭の結果によりて、佛國はアルサス、ローレンの地、五千六千方哩を割きて普國に譲り、(四)普魯西を盟主として他の三主國六大公國五公國七侯國三自由市同盟連合して二十萬八千方哩

の獨逸聯邦を中央歐羅巴に建て、(五)露土戰爭の結果によりて、伯林に於ける列國會議は十五萬七千方哩の土耳其帝國を割きて、ブルガリヤ、ルーマニヤ、セルヴニア、モンテネグロの四國を獨立せしめたるを以て、土耳其は削られて六萬一千方哩の小國となり、(六)土希戰爭の結果によりて、希臘はセッサリアの地を土耳其に譲らんとし、今正に一段落を告げんとす。

歐洲各國現時の國勢は、世界の所謂開化國にして權勢頗る旺盛なり、就中英、佛、獨、露、伊、澳の六國は文運能く進歩し兵備亦能く整ひ、自ら世界國實際上の盟主を以て居る、世に歐洲六強國の名あり、其他各國とも最近二百年來競ふて探検船を出し、或な海路遠征隊を送り、無所屬地を占領し、或は弱國を征服し、殖民地の開拓を勉め、海外に所領地を覓めたる結果は、今世紀末に至りては、何れも本國の地積よりも遙かに廣大の屬地

を有し、殖産工業を奨励して全盛に其地を利用せり、今各國の面積人口及各殖民地の面積人口を比較對示すれば左の如し。

國 名	地 積(方 哩)	人 口
英 吉 利	本國 一〇〇、一五、四七七 屬地 二、〇九五、六一六	三八、一〇四、九七五 二九八、二〇五、七六七
露 西 亞	六、五四九、一〇〇	一〇六、一二一、〇〇一
佛 蘭 西	二、〇四、〇九二 二、三五四、六四六	三九、五一七、九七五 二九、二四八、一七三
獨 逸	二〇八、八三〇 一、二二八、三四五	五二、二七九、九一五 一、九五二、〇〇〇
葡 萄 牙	三六、〇三八 七八二、九〇九	五、〇四九、七二九 三、四六六、六八九
和 蘭	一、二、六四八 七七五、九六七	四、九二八、六五八 一、八六八、一八九
伊 太 利	一、一四、四一〇 四九二、〇六八	二八、四六〇、〇〇〇 七、四九八、〇〇八
西 班 牙	一、九七、六七〇 一六三、〇二六	一七、五六五、六三二 九、九九八、五三四
丁 抹	一五、二八九 八六、九五九	二、一八五、三三五 一、二七、二〇八

今世紀に於て歐洲各國の大進歩を爲せしものは「交通機關の整備」必ず其一因に居らん、歐洲は天然の河道多き上に人工を加へ、且つ鐵道、電信、電話、郵便、船舶等の諸機關甚だ整備せり、中にも國家の動脈とも謂ふべき鐵道は實に本世紀本洲の發明に係り、各國競ふて延長布設したるを以て、各都市概ね相通せざるはなく、歐洲鐵道線路圖は蜘蛛の網の如しと云ふも決して過言にあらざ、全洲の鐵道延長は十五萬八千哩にして、世界の三分の一餘を占め、其長さは赤道を六周すべし、左に各國鐵道線の延長及人口一萬に對する哩數面積百方哩に對する哩數等を示せば左の如し。

國 名	延長哩數	人口一萬に付哩數	面積百方哩に付哩數
獨 逸	二八、八八二	五、五	一三、八
露 西 亞	二六、二一一	三、四	三、三

佛 蘭 西	二四、四四〇	六、四	一、二、九
英 吉 利	二一、二七七	五、五	一、七、〇
埃 地 利 洪 牙 利	一八、六一五	四、二	六、九
伊 太 利	九、五八〇	二、八	七、九
西 班 牙	七、一〇一	四、〇	三、五
瑞 典	五、四五三	一、一、四	三、一
白 耳 義	三、四〇〇	五、五	二、九、九
瑞 西	二、一九三	七、四	一、三、七
和 蘭	一、九二四	四、〇	一、四、〇
羅 馬 尼	一、五九八	三、四	三、二
葡 萄 牙	一、四五四	三、一	四、〇
丁 抹	一、三八五	六、〇	九、一

土 耳 其	一、一二九	一、二	一、一
那 威	一、〇〇〇	一、九	〇、八
希 臘	五、六八	二、五	二、二
塞 爾 維	三、三五	一、五	一、七
其 他	六、八	二、一	一、七、二
總 計	一、五七、九九一	四、〇	三、九

備考 當時日本の鐵道延長は三千一百哩にして人口一萬に付〇、七面積百方哩に付一、九なり

歐洲各國は疆域相密通するを以て、勢互に競争して軍備を擴張し、陸軍なり海軍なり、其國の形勢に應じて盛に増加するの必要あるを以て、或るものは國內の壯丁は概ね既に驅り盡くして又殆ど餘力なきに至る國あり、且つ軍備の爲め莫大の國資を費し、國債額甚だ多く、國民の負擔

輕からず、財政頗る困難なる國あり、或は通商貿易大に發達し非常の輸出入額に達する國あり、今各國財政の狀況を示す爲め、歲出入額、國債額、輸出入額の一人口に對する比較を擧ぐれば左の如し。

國名	歲入額	歲出額	國債額	輸入額	輸出額
埃地利	五、三七	五、三六	三〇、一八	二、四六	二、六七
丁抹	七、一六	八、〇七	二二、八九	四、一〇	三、〇五
獨逸	五、七九	五、八六	五、四六	二、二〇	一、六〇
英吉利	一一、六二	一一、四八	八五、八九	六〇、六六	三六、三二
那威	六、八七	六、八七	一五、五四	二九、八七	一七、四六
葡萄牙	〇、六九	一一、〇一	九八、二二	一一、四七	七、三一
瑞典	五、四一	五、四一	一四、四六	二、〇四	一七、〇〇
土耳其	二、〇七	二、四〇	二二、二四	二、五七	一、四四

國位	本	兩	銀	金
白耳義	一〇、八七	一〇、七二	七二、八一	九三、一二
希臘	九、一四	八、八一	六六、二二	一二、三九
伊太利	二〇、三三	一〇、七五	七二、七七	七、一七
瑞西	四、五六	四、八三	二一、一〇	九五、九六
佛蘭西	一六、五七	一六、一九	一五四、〇八	三〇、八八
西班牙	八、二三	八、一七	六九、八五	一〇、九二
和蘭	一一、三三	一一、八五	九七、六〇	一一七、九四
銀本位國	露西亞	五、五〇	五、四四	一八、二一
				二、三六
				四、四八

此表によれば人口に對する歲出入額の最も多きは佛蘭西にして、十六弗以上に當り次に英、和、白、伊、葡の各國は皆十弗以上なり、又最も寡きは土耳其とす、國債額の最も多きも佛國にして一人口に付百五十四弗に當り、之に亞き葡、和、英、白、伊等は皆國債負擔の重き國なり、輸出入額の最

も多きは和蘭にして瑞西、白耳義、英吉利等之に亞ぐ、是を以て各國に於ける財政の現況を見るべし。

阿非利加洲

『阿非利加』の名は人をして直に野蠻未開と聯想せしむる程、人事の最も不發達の大陸なり。世に『闇黒阿非利加』と呼ばん、或は『最闇黒阿非利加』と稱せらるゝものは是れ實に本洲の地理的形勢の劣等なるに因るものなり。抑々阿非利加の形勢は、一大塊状をなして地圖上の觀既に殺風景なり。海岸線の出入甚だ乏しくして、文化侵入の路なく、内地は殆ど一様の高原性にして凸凹參差少なく、人類の競作經營に適せず、山脈亦洲の周邊を繞りて海洋と内陸とを遮斷するを以て、氣候之れか爲めに惡性に、内地には廣大無邊の沙漠之れが爲めに生じ、内地と海岸との交通之れが爲めに不便に、本洲をして文化開發の途を杜絶せしめたるやの

觀あり。

阿非利加天然の事情は斯の如し、加ふるに之に住する人民は獍猛殘忍の黒種にして、人を屠り其肉を食ふを辭せざる蠻族の跋扈する危険至極の地なるを以て、阿非利加内地は從來唯々獷狂の蠻民の居所、猛獸毒蛇の巢窟として敢て之を顧る者なかりしか。千八百五十年宣教師モファトなる者初めて南阿非利加地方を探檢せしより、近來歐洲の冒險家及好奇家は競ふて此の未開の蠻地を跋渉して、古來封緘の秘函を開かんとせり。特に彼の豪傑リボンクストーン氏の如きは前後數回の探檢を遂げ、大に其未開の地を世に公にしたれども、其身は終に蠻地ペンパ湖附近に於て、疫癘の爲め鬼籍に上れり。其後ブルトン氏スベーク氏ベーカー氏カメロン氏等の探檢あり、就中スタンレー氏の如きは本洲内地探檢の功績最も赫々たる者なり。氏は數回阿非利加内地を探檢した

れども、特に有名なるは千八百八十五年中央阿非利加一圓叛亂の時、蠻兵の重圍に陥り其命旦夕に迫れる、埃及の守將エミーン侯(獨逸人)を救ひ出さんが爲めの義舉探檢にありき、則ち千八百八十七年金剛河口より溯りし赤道を横ぎり、大湖地方を經、全く中央内地を一貫して、東岸ツンジバールに出たるは、同八十九年十二月なりし、其日子を費すこと千十二日、陸路約七千軒(凡我八百里)なり、初め同行者七百名ありしが、途中或は蠻人に虐殺せられ、或は疫病に斃れ、生還者僅に百七十餘人となれり、其困苦艱難想ふべし、氏は歸來最關黑阿非利加なる書を著して、大に内地の地理及事情を世に知らしめたるは、本世紀末、阿非利加に於ける偉業として、其功實に没すべからざるなり。

洲内唯々一個たも真正なる獨立國なく、歐洲諸國の屬地たらずんば、則ち邦國の體を爲す能はざる小部落たるに過ぎず、洲の東北を占むる埃及は世界最古の國を建て富強に誇りしも、今や萎靡振はず、歐洲の牽制する所となれり、抑々此の如きは既に述べたる各事情、即ち本洲の地勢、風土の然らしむる所なり、尙詳に謂へば、海岸線の出入に乏しき、地勢の交通に不便なる地形、單一にして分業に適せざる、氣候の惡性にして開發に適せざる等の各事情は、本洲をして久しく闇黒妖怪の窟たらしむる所以ならん、然れども歐洲各國の競争は近時専ら此蠻土に及び、土地を割取して保護となし、或は蠻域を探檢して屬地となし、鐵道を敷設し、郵便電信を置き、頑民を教導し、鑛山を開掘する等、阿非利加問題頗る喧し、故に世人をして第二世紀の戰場は夫れ阿非利加大陸に在らんかと謂はしむるに至る、即今に於ても埃及事件の如き、或は英の遠征軍ナ

イル河南下をメネリツク種の頑強に抵抗するある佛國も亦暗に英の南下を牽制するが如き又佛國のダホメー國及馬島遠征の如き伊國の亞比西尼亞に於ける英國の南阿非利加共和國(トランスバール)に於けるが如き獨國の西南阿非利加殖民地に於けるナマクワ及ダマラ土人との紛争の如き佛國の蘇丹地方占領の如き特に最近の大問題たりしギニラ地方なるナイロア一河流域に於ける英佛の衝突の如き世の耳目を惹くべき事件少なからざるものは或は本洲機動の一端として觀るを得べきか然らば此の蒙味の安逸を樂む蠻民も漸く世の競争場裏に驅られて其眠を破り遂に開明の光輝を仰ぐを得るに至る期あるべきが

以上の如く歐洲各國競ふて本洲を分割占領したる結果は洲内重要な部は既に盡く之を蠶食し了り英と佛と相對し獨と伊と境を接すると

云ふが如き有様は殆ど歐洲各國を阿非利加洲上に移せし看あり今本洲を歐洲諸國の各領地に分別すれば左の如し。

英領國		佛領國		日領地		葡領地	
英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加	英領殖民地	英領ベチエナランド	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
セーチエル島	モーリチウス島	ソコトラ島		岬殖民地	英領ベチエナランド	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
シーラレオン島	セントヘレナ島	アンセンション島		英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
亞爾及	突尼斯	セネガムビア附近		英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
金剛及カブン河邊	砂原地方	馬島及附近諸島		英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
スレーブ海岸	ダマラランド	ナマクワ		英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
ザムジバ地方	アツヤン			英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
アンゴラ	モザムビツク	アゾールス島		英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加
マデイラ島	プリンシペ島	セントトーマス島		英領中央亞弗利加	英領東部亞弗利加	英領蘇丹	英領南部亞弗利加

西班牙領 加奈里諸島
 フエルナンドポール島
 アンノボン島
 ベルデ諸島
 土耳其領 埃及
 トリポリ
 亞米利加洲

亞米利加は僅に四百六年前始めて世に知られたる新世界なり、且つ其當初は今の阿非利加と同じく總て歐洲諸國に分割占領せられ、其配下に立ちしも、近來二三所を除くの外は、盡く獨立して自主の共和國政體を組織し、文運發々として進歩し、今や其祖國たる歐洲と併稱して歐米と呼はるゝに至る、是れ主として本洲の自然的事情が幫助冀贊せるによる。

亞米利加の位置を見よ、東方に大西洋の海路を航して直ちに歐洲諸國に達すべく、西は太平洋を越へて亞細亞諸國及南洋諸島に通じ、所謂「世

界の中央市場たるべき資格を有せり、特に北米の大部は北温帯を占め、中部以南は氣候快和にして、其海岸は良港多く、内地は廣遠なる肥沃の原野に世界有數の大河之を灌溉し、山地には貴金鑛物を埋藏すること無盡と稱せらる、故に世界各國より此沃野を指して移住を企つる者、年々甚だ多く、寂寥たる漁村は變じて萬櫛林立の大埠頭となり、荆蕪藎々たる荒地は、化して田圃となり、物産年に増し、國力月に盛なる勢は、世界の齊しく瞻望する所なり、中にも北米合衆國は殖民興産の進歩、文學技術の發達は、優に舊世界の開明國と駢馳するに足り、而して豊富の度は却て既に萬國に卓越するに至れり。

北米の北部三百三十二萬方哩を占むる地を加拿陀とす、此地は十六世紀の初、佛人によりて始めて殖民せられ、今のキベックに新佛蘭西なる一村を建てし、當時は殆ど無人の曠野なりき、佛人の創建に代りて加拿陀

經營の業を操りしは、英入にして一千七百六十三年の巴里條約によりて加拿陀の所有權は英人の手に移り、本世紀下半に至りて、ホドソン灣會社より西北部一圓を購入し、千八百七十一年今の英領コロンビアを加へて、此の廣大の版圖を開き、既に一億弗以上の貿易額を見るに至れり、近來加拿陀獨立の聲も揚げざるにあらずれども、先以て比較的に平穩無事の地たり、唯昨年夏コロシダイクに於ける大金鑛の發見は世の黃白會社を驚動羨殺せしめし出來事なり、
 北米合衆國は世界の富國なり、其生産力の無盡なること此國の特種とも謂ふべし、農産の年額は、玉蜀黍八億五千萬弗、小麥五億二千萬弗を收穫し得べく、綿花の産は全世界綿花額の六割餘を占め、森林の産額は年々八億弗以上に達せり、特に鐵物に富めるは世界の首位に居り、黄金は年五千三百萬弗を産し、濠洲に一步を譲れども、世界の第二位たるを失は

ず、銀は七千六百萬弗、銅は四千九百萬弗、鐵石炭の兩鑛は唯英國に譲れども、年々産額増加の割より見れば、三五年を出て、ずして英國に凌駕すべく、現今鐵は九百萬噸、石炭は一億三千八百萬噸を産せり、石油は五千九百萬弗を産し、世界第一に位せり、總て鑛産の年額は二億二千萬弗に上れり、
 合衆國の天産既に斯の如し、此の豊富なる原料と餘裕ある資本と自在なる交通とを利用して施設したる工業は、其進歩の勢實に目覺しく、『世界工業の女王』を以て居る英國をも後に瞠若たらしむるの勢あり、最近の統計によれば、工業の爲めに投せられたる資本總額は六十七億弗に上り、製造所殆ど四十萬個所之れに使用する工夫五百萬人、而して其産出價額は無慮十億弗に達せんとす、
 以上の如き生産力は、曠に六千三百萬の國民を有する一國の經營とは

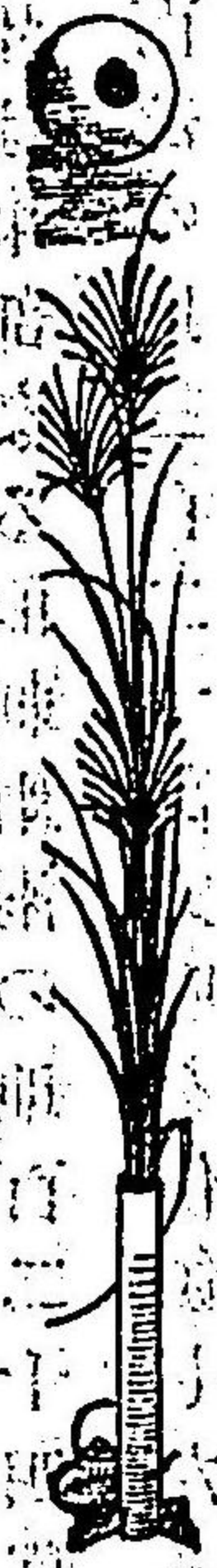
思はれざる程なり、是を以て國富發達の迅速なることも世界中其比儔なく、置に百二十三年前まで他の屬地たりし國の富力とは覺へざる程の進歩なり、然るに其の進歩の速きは、其の富力の増加の速きを以て其の合衆國の富力統計に據れば、一千八百五十年に於ける國富の統計は我百二十九億圓に過ぎざりしが、置に四十年後の一千八百九十年には既に一千七百七十億圓の巨額に達せり、故に此の四十年間に九倍以上の増加を示せり、而して富の増加は、適に人口の増加よりも速に、千八百五十年には一人人口に付五百四十圓なりしが、同九十年には一千八百七十圓の割となれり、而して國富價格の主要なる物は十八萬千哩の鐵道及前述の鑛山農業及製造の材料なり、是れ建國百三十年の後進國の富力なり、其の富力の増加の速きは、其の富力の増加の速きを以て其の合衆國は建設以來、其國是は専ら富の一點に向ひて直線に進行し、平和

は其主義にして、自由は其目的なりき、故に務めて他國との覺隙を避け、干戈に訴へても虚權を張るか如きは萬々之れ無き所、況んや土地の兼併の如きは、其國是にあらざりき、然るに富者財に飽きて漸く浮雲の虚榮を慕ふが如く、此國も亦富に飽きし者の如く、嗜者の平和主義漸く一變じ來りて實質乏しき虚權を張るの状事を物々に顯はれ來りて亦掩ふべからざるに至れり、一千八百八十五年南米ペネズエラのトリニダット島境界の紛議に干涉して初めて其手並を示し、又數年來布哇事件に關係して暗に革命黨の後援となり、今又代議院に於て米布合併案を通過したるを以て、早晩布哇の地を兼併するに至るべし、又一昨年来玆瑪事件に關係して遂に西班牙と戦端を開きしが如き、其舉動頗る活潑となり南北戦争以來の餘勇を示し來れり、其の進歩の速きは、其の富力の増加の速きを以て其の合衆國は建設以來、其國是は専ら富の一點に向ひて直線に進行し、平和南北米の連鎖たる中央亞米利加は本世紀の始め中央亞米利加聯邦を

組織し、次て千八百三十九年分離して今の五共和國を建設せり、爾來今日まで内亂外訌斷ゆる間なく、其基礎甚だ軟弱なり、ニカラグワ、コスタリカの兩國は現に干戈を交へ、其雌雄未だ決せず、中米は太平太西の兩洋に限る一綫地なるを以て、此地峽開鑿の企は偏く世人に知るの所之に關する計畫の重なるものは(一)パナマよりアスピノールに鐵道の敷設(二)テファンテベック鐵道の敷設(三)ニホ河に沿ふ鐵道敷設(四)ニカラグワ湖を通ずる運河開鑿(五)ダリキン地頭に運河開通(六)パナマ地頭運河開通(七)セリカリ灣よりダビス河口に至る運河開鑿等の諸件なりとす、此の如く諸計畫あるも第一件の外未だ悉く成効に至らず、第四及第六の兩件は最も成効に近かるべしとて世人の大に切望して止まざる所なれば、來世紀には太西太平洋の航路を短縮し、世界交通に一大變事と與ふるを見るに至らんか。

南亞米利加の初めて世に現はれしは一千五百二十九年にあり、其發見の効は西班牙第三次の遠征にあり、爾來西班牙、葡萄牙の兩國は盛に此地に殖民し、葡萄牙は東部なる伯刺爾爾の地、百二十四萬方哩を占領し、西班牙は西部及南部の地、三百二十萬方哩を併領したるを以て、一時は全土概ね兩國の所屬に歸せり、然るに今世紀の始め智利先づ西班牙の羈絆を脱して獨立せし以來、屢に二十年間に各地一時に獨立して共和國を建て、西班牙は終に南米に於ける主宰權を全く失ひたり、葡萄牙領たりし伯刺爾爾も亦千八百二十二年獨立して、亞米利加に於ける唯一の帝國を建てしも、同八十九年の革命によりて君主を葡國に送還し、共和國を建てたれば、南米に十個の獨立共和國を見るに至り、殘るは只だギアナの一部のみ英佛和三國の分領たり、南米の十共和國は皆今世紀の新獨立國なれば、其國體並に政府の基礎

未だ全く確立せず、且勢力ある移民は概ね歐洲西南部の羅匈種に係
るを以て、其氣質多くは輕佻浮薄の弊風を齎し來り、較々もすれば革命の
争亂あり、現に伯刺爾爾に於ては王黨民黨の軋轢あり、又各國の間にも
相反目して其紛争殆ど寧歲なく、智利秘露兩國間の戦争漸く其局を結
び、間もなく智利亞爾然丁間の紛擾となり、又ボリビヤ、ペルー、ブラジルの確
執も亦破裂を免れざるべく、南米の將來亦容易に卜すべからざるもの
あり、



看 小 字 宙

看よ宇宙爾の眼前咫尺は宇宙なり、
看よ宇宙爾の起臥する世界の大小は宇宙の大小に比すれば、實に蒼海の粟なり、

予は斯く吾人が常に親炙する宇宙、此の絶廣絶大なる宇宙に就きて、地
文學の所謂地球學として其一斑を語らん、
天晴れ雲なく又月なきの夜、仰いで大空を望めば、其の數限りも知らぬ
夥しき星斗は燦爛として天上の花の如く頭上を飾れるを觀るならん
而して更に注意して星光の輝きを視れば、其の光輝の色は一樣にあら
ず、或は稍銀色に近き皎々たる光輝を放つもの、或は金色に似たる爛々
たる光輝を射るもの、或は赤色を帯びる赫々たる光輝を投するもの等

あるを發見すべし、斯く發射する光輝に差異あるものは、主として星體、其の物の老少によるものなり、抑々當初の大宇宙は一種の瓦斯を以て充たされたるが、其の瓦斯は次第に處々方々に凝集して、星體の初めを成し、其凝集したるものは再び凝縮して熔液の固體となり、更に凝固して固體の圓球と成れりとの説あれば、未だ灼熱の瓦斯を以て被はれ而して自ら發光するものあり、或は猛熱の熔團より光輝を放つものあり、斯くの如く自ら光及び熱を放ち、其居所一定せる星を恒星と云ふ、我が太陽の如きは恒星の一なり、又星體の既に老ひたるものは、表面には其熱を失ひ、只内部に熱を藏むるのみとなり、自ら光を發すると能はず、恒星の光を藉りて輝く星あり、我が地球の如き即ち是なり、星體の尙ほ一層老朽するときは、表面に熱を有せざるのみならず、内部の燒をも發放し盡くして全く死球となれ

熱

るものあり、月球の如く即ち是なり、斯くの如く此の大宇宙間には太陽、地球、月球の如き各星體無數に羅列散在せり、而してそれ等の各星は其の内の重なる恒星を主星として、其の附近にある數個の星は之を中心にして一系統を成し、他の星は其の周圍を各軌道によりて旋轉せり、其の有様は恰も國に君主ありて人民を統率せるが如し、我が太陽系の如きは此の如き系統を有する一團體なり、

我が太陽系は太陽を中心とし八個の遊星と今日まで發見されたる四十有餘の小遊星とて以て一系統を組織せり、八遊星とは水、金、地、火、木、土、天王、海王の諸星にして各星體の大きさは左の如し、

其の大きさ(直徑)

1. 水星 Mercury.

三〇〇〇哩

- 2、火星 Mars. 四、二〇〇哩
 - 3、金星 Venus. 七、七〇〇哩
 - 4、地球 Earth. 七、九〇〇哩
 - 5、天王星 Uranus. 三、二七〇〇哩
 - 6、海王星 Neptune. 三、四、五〇〇哩
 - 7、土星 Saturn. 七、一〇〇〇哩
 - 8、木星 Jupiter. 八、七、三〇〇哩
- なり我が地球は其の大きさより言へば第四等にして直径七千九百哩あり。木星は最も大にして殆ど我が地球の十一倍あり。地球を直径一尺とすれば木星は一丈一尺の大球儀となるべし。然るに太陽は尙ほ一層大にして其の直径八十六萬五千哩あり。故に殆んど木星に十倍すれば一尺の地球儀の比に太陽を製せば、實に百十尺、殆んど二十間の直径あり。

る大球となるべく、又容積に於ては凡百二十六萬の地球を合して、太陽たるを得べし。假に太陽を直径二尺の球とすれば地球は之を距る四百三十二尺の所に置ける一粒の大豆に譬ふべし。されば若し太陽より地球を望みたらんには肉眼にては到底我地球は望み難かるべし。遊星が太陽よりの距離を示せば遠近頗る隔絶せり。即ち距離の遠近によりて擧ぐれば左記の如し。

- 水星 三、六〇〇〇哩
- 金星 六、七〇〇〇哩
- 地球 七、九〇〇〇哩
- 火星 一、四、一〇〇〇哩
- 木星 四、八、三〇〇〇哩

此間四百有餘の小遊星あり

土星

八八四、〇〇〇、〇〇〇哩

天王星

一、七八〇、〇〇〇、〇〇〇哩

海王星

二、七八〇、〇〇〇、〇〇〇哩

我地球は太陽より第三位の所にありて、太陽系中に於ては寧ろ太陽に近かり方なり、さるにても前にも言へる如く、太陽より我地球を望みたらんには世人が常に廣しと言へる此の世界も肉眼にては、見へ難き程に、まで小となる遠さにあり、又試に地球より太陽に向つて旅行するものとせんか、一時間に二十哩、東京横濱間の汽車の速度を走る、汽車に駕して一寸の暇なく直行するものとしても、五百二十五年の歳月を要すべきを以て、其遼遠なること知るべし、海王星の如きは地球と太陽との距離の三十倍なれば、右の汽車にては實に一萬五千七百五十年の永久を要するなり、我太陽系の廣大なること知るべし、

されども太陽系の大きさを聞きて、廣大なるに驚く、勿れ、絶廣絶大なこの形容に、未だし、と言ふべし、即ち一時間二十哩の汽車にて一萬五千七百五十年にて達すべき距離は宇宙間の短距離にして、宇宙旅行の只一步と謂ふべきのみ、此距離は我太陽系に最も近かき他の恒星に至る距離に比すれば、僅に其三千七百二十一分の一なり、我太陽系と最近の恒星間を三千七百二十一里とすれば、太陽と海王星との距離は只其一里のみ、故に各恒星間の距離は里數を以て之を示すも未だ其比較を爲すに足らず、彼の迅速なる光線の速力を以て始めて之を示し得べし、即ち光線の速度は一秒時間に十八萬五千哩の距離に達すべし、一秒時間に赤道の周圍を七周回すべき速度なることを記憶せよ、而して今地球の最近に在る恒星より來射する光線と雖ども、三年半を経るにあらざれば我地球に達せざるなり、又一等星は光輝の強弱により一等より十四

等に區別す、重なるに遠近に關す、一等より六等までは肉眼にて視得べし、の光線は十五年を経るに非されば我地球に達することを得ず、二等星は二十八年半を要し、三等星は四十三年を要す、六等星に至りては百二十年を経るにあらざれば我地球に達すること能はず、十二等星の如きは實に三千五百年を費して其光線始めて我地球に達すべし、故に三等星が若し消滅することありとするも四十三年の後までは其光を認め得べく、十二等星の如きは我紀元一年に既に消滅したりとするも尙ほ吾々は未だ之を知らざるの有様なり、其距離の貌遠なる憶測の外にありと謂ふべし、此の如き星は、一等星二十個、二等星六十五個、三等星二百個、四等星四百五十個、五等星一千二百個、六等星に至りては大約四千餘

個あり、此等の各星は皆悉く前述の如き遠距離を以て羅列せり、其外彼の雲の如く霞の如く天を横断する美麗の白帯と看ゆる銀河は皆無数の小星の簇聚せるものにして其數殆ど測るべからず、此等の星は密集するが如く視ゆれども只其距離の遠きによるものにして、林立の樹木も林中に入れば互に相隔つれども之を一望すれば相密接して空間を見ざるに同じく、銀河を成せる星も皆互に遠距離を以て羅列すれども、遠く之を望むを以て見方によりて只一帯の銀河と見へ、天河と見へ、世界の大道と見へ、黄金の坦路と見へ、ヤトコツアの梯と見ゆるのみ、知るべし、絶大の形容は獨り宇宙にのみ用ゆべきを、吾人は常に此の絶大の宇宙の下に起臥して常に之を望み何すれど醒寤することとを須ひんや、三尺の書窓狭しと言ふ勿れ、寸分の穴隙も無窮の宇宙を望み得べし、大洋に望みて廣しと言ふ勿れ、是れ宇宙深の窪所に殘れ

民友社 出版書籍目録

(明治卅四年十二月改)

注意

- (一) 民友社書籍は全國各賣捌所に毎發兌期日を誤らず發送す
- (二) 若し賣捌所に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非らずして其賣捌店に何等かの事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし
- (三) 斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし
- (四) 注文は書名を明瞭に記送さるべし上、中、下又は第一第二等ある書籍は落ちなく之を記別せらるべし
- (五) 爲替振込み宛所は東京芝口郵便支局

目錄に部類を別つに就き一書にして數部に涉るものあり是等は其内の一の類に收めたり例せば「帝國主義と教育」が政治にも教育にもすべての經世的方面に涉るる雖も之を教育的書類に入れし如きは是れなり

(明治二十年二月創立)

東京市京橋區
日吉町四番地

民友社

蘇峰雜著

吉田松陰 (肖像入)

新日本之青年

誕生 徳富猪一郎編纂 久保田米権監

蘆花生編著

自然の人生 小説

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
六十五	六十五	二十五	四十二	六十五	六十五	六十五
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

四

櫻痴居士著

幕末政治家

小説 不
外 交 如
探 偵 奇 歸
名 婦 異 譚
青 山 白 鑑 聞
歴 史 の 片 雲
グ ラ ツ ド ス ト ン 影

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四十二	四十二	四十五	六十五	四十五	六十五	六十五
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

五

郵定
稅價
四十三
錢

◎◎懷往事談
◎幕府衰亡論

探越停
春著

教育叢書

◎第一卷 家庭夜話
◎第二卷 齊家小訓
◎第三卷 國民と時勢
◎第四卷 地理と人事
◎第五卷 風土と人情
◎第六卷 時務的的教育

六
郵定 郵定
稅價 稅價
六三 四二
十五 十
錢錢

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價
四十 四二 四二 二十 四二 四十
八 十 十 五 十 八
錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

教育書類

◎成和民著 功論
◎山路愛山著 主義と教育論
◎立山著 身錄
◎慶應大學教授シヨン、アフツキ一貞著 修養と遺傳論
◎教修育

式典書類

◎主方伯 田中子 禮式
◎交際外 禮式

(印 刷 中)

郵定 郵定 郵定 郵定
稅價 稅價 稅價 稅價
二四 二十三 二四 二五
二 十 十 五
錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

七
郵定 稅價
四三 十五
錢錢

十二文豪

遠田佳澄著 外シ エ
 米田實著 外ハ バ イ
 諸方維嶽著 外シ シ ル
 内田實著 外シ シ ヨ
 平田久著 外シ シ ヲ
 竹越典三郎著 第一卷 カ 一
 山路彌吉著 第二卷 マ コ
 山路彌吉著 第三卷 萩 生
 祖 徠

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價
 四十八 四十八 四十八 四十二 四十八 四十五 四十五
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

宮崎八百吉著 第四卷 ナ ル
 高木伊作著 第五卷 ゲ 一
 北村門太郎著 第六卷 エ マ
 塚越芳太郎著 第七卷 近松門左衛門
 山路彌吉著 第八卷 新井白石
 人見一太郎著 第九卷 ユ 一
 徳富健次郎著 第十卷 ト ス
 藤田思軒遺著 徳富蘇峰 山路愛山 校定 第十一卷 賴山陽及其時代

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價
 四十八 四十八 四十八 四十八 四十八 四十八 四十八 四十八
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

◎ 藤越芳太郎著
第十二卷 瀧澤馬琴 (屬稿中)

傳記類

◎ 吉田勿來著 鴻章
◎ 松方伯爵題辭 吉田字之助著 民兼
◎ 德富蘇峯序 野山記
◎ 松越停春樓主人著 中久喜信周著 舟后
◎ 西勝 民友社編纂

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
六五	二十	四二	四二	二十
十	二	十	十八	五
錢	錢	錢	錢	錢

◎ 藤越芳太郎著 熊澤 蕃
◎ 岩崎 彌太郎
◎ 德川 二名
◎ 將軍 有半
◎ 森 川 軍
◎ 井原 西龍
◎ 雲 西龍
◎ 詩 東
◎ 藤 人
◎ 阪 田
◎ 弘松宣枝著 (題字肖像手蹟入) 本
◎ 寺田輝伴序 角田柳作著

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四十五	四十八	二十二	二十二	四十二	二十二	四十二	四十五	四十五	八十八
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

◎ 第一卷 家庭の和樂
 ◎ 第二卷 夏の家庭
 ◎ 第三卷 玩具と遊戯
 ◎ 第四卷 家庭教育
 ◎ 第五卷 小児の養育
 ◎ 第六卷 家庭衛生
 ◎ 第七卷 家政整理

家庭叢書

◎ 吉田松陰 文
 ◎ 横井楠文 文

十三
 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價
 二十 二十 二十 二十 二十 二十 二十
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

郵定 郵定
 税價 税價
 二十 二十
 二 五
 錢錢 錢錢

民友社編纂

◎ 征清壯烈談
 ◎ 鐵道王
 ◎ 山縣有朋
 ◎ 大隈重信
 ◎ 兩ケケ
 ◎ 子ル
 ◎ 子ル
 ◎ ヲエ
 附 岡本柳之助 武
 附 矢野正文 雄
 大石 正巳

十二
 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定
 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價 税價
 二十 二十 二十 二十 二十 三十 四十 四二 四二 四十
 二 二 二 三 二 五 十 十 五 二
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

◎ 名人小野五平編纂
◎ 將棋秘訣

◎ 事 務 界
◎ 學 問 の 世 界
◎ 武 備 教 育 用
◎ 技 術 育 用 界
◎ 學 校 生 涯 術
◎ 本 朝 美 術

娛樂書類

談話類

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四三	二十	二十	二十	二十	二十	二十
十	二	二	二	二	二	二
錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢

◎ 第八卷 簡 易 料 理
◎ 第九卷 社 交 一 斑
◎ 第十卷 婦 人 と 職 業
◎ 號 外 家 庭 財 務
◎ 號 外 名 士 と 家 庭
◎ 號 外 紫 式 家 庭
◎ 號 外 清 少 納 言

青年會叢書

◎ 簡 易 生 活 部
◎ 娛 樂 俱 樂 部

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十
錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢

◎ 況陸軍少將 石黒忠清 著 翁 叢 話

小說類

- ◎ 第一國 國民 小說 說
- ◎ 第二國 國民 小說 說
- ◎ 第三國 國民 小說 說
- ◎ 第四國 國民 小說 說
- ◎ 第五國 國民 小說 說
- ◎ 第六國 國民 小說 說
- ◎ 第七國 國民 小說 說
- ◎ 第八國 國民 小說 說

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四十	四十	四十	四二	四十	四十	四十	四十	四十	四廿
五	五	五	十	五	五	五	五	五	五
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

十六

文學書類

- ◎ 惠磨遜の書簡
- ◎ 武藏野
- ◎ 日本文學梗概
- ◎ 近松著作一斑振越芳太郎著
- ◎ 巢林子戲曲近松著作一斑附錄
- ◎ 名家紀行文選
- ◎ 今世名家文鈔

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四三	六三	四十	八三	二二	四二	四三
十	十	八	十五	十	十四	十
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

十七

◎ 森田思軒重譯 古今圖書集成 小

◎ 懷 古 反 省 古 齋 品

◎ 湖處子 歸 八百卷著

◎ 正岡子規 歸 四百卷著

◎ 高濱虛子 歸 四百卷著

◎ 河東碧梧桐 歸 四百卷著

◎ 新 俳 共編插畫四季三十餘

歷史類

十八

郵定 稅價 六十五 錢

郵定 稅價 四十五 錢

郵定 稅價 四十二 錢

郵定 稅價 四十五 錢

郵定 稅價 三十五 錢

郵定 稅價 三十五 錢

郵定 稅價 三十五 錢

◎ 山東 塚越芳太郎 著 史 餘 錄

◎ 山路 愛山 著 史 論 集

◎ 平田 久 著 十 九 世 紀 外 交 史

◎ 渡邊 修次郎 著 內 政 外 教 衝 突 史

◎ 森 三 溪 編 江 戶 と 東 京 (四那、大久保、勝三氏肖像入)

◎ 歷史 攻 究 法 (品切)

◎ 哲學 變 遷 史 (品切)

郵定 稅價 六十四 錢

郵定 稅價 六十五 錢

郵定 稅價 六十五 錢

郵定 稅價 四十五 錢

郵定 稅價 四十五 錢

郵定 稅價 二十二 錢

郵定 稅價 二十二 錢

十九

世界國勢書類

○西亞細亞旅行記 (地圖及種
兒玉憲博總督序、後藤民政長官序、福島陸軍少將書簡
德富蘇峰序、家永豐吉著)

○露國事情
露國政府編纂 日本民友社譯述

○露西亞帝國
平田久著

○支那及列國
民友社編

○支那便覽
國民新聞社編纂

二十

郵定稅價 四三十錢

郵定稅價 十二六錢

郵定稅價 六三十五錢

郵定稅價 四二十錢

郵定稅價 二十二錢

○朝鮮王國
樂四期君、德富蘇峰君序、池田謙四著

○比律賓群島
民友社編纂

○已成西比利亞鐵道

政法書類

○國際法要論
ウエス、ト、キ原著、深井英五補譯

○政府と政黨
米國ローエル氏原著、民友社譯述

郵定稅價 八五十錢

郵定稅價 四十八錢

郵定稅價 二十二錢

郵定稅價 一圓五十錢

郵定稅價 十二圓八十錢

二十一

◎深井英五郎比較憲法論

◎支那論

◎國家と政府(品切)

◎責任内閣

遺稿類

◎秋篠井平四郎著 男横井時雄編

◎小楠遺稿

社會及經濟書

◎乾坤社會百方面

◎乾坤最暗黒之東京

◎英國英國産業史(上卷)

◎英國英國産業史(下卷)

◎世界經濟上の變動

◎文明之弊及其救治(品切)

◎現時之社會主義(品切)

◎經濟學人道(品切)

郵定 稅價 四十二錢

郵定 稅價 三十錢

郵定 稅價 二十錢

郵定 稅價 二十錢

郵並上 稅製金 十一圓六錢

郵定 稅價 四十五錢

郵定 稅價 二十三錢

郵定 稅價 四十五錢

郵定 稅價 四十五錢

郵定 稅價 二十二錢

郵定 稅價 二十二錢

郵定 稅價 二十二錢

郵定 稅價 二十二錢

◎ 自哲人種の前途

雜書類

◎ 時務

三

論

◎ 新論

十

種

◎ 新式旅行

日

記

◎ 伊達騷動記

動

記

◎ 歐洲見聞錄

見聞

錄

郵定稅價 二十四
二十二錢

(印刷中)

郵定稅價 二十

郵定稅價 四並上
廿五
錢錢

郵定稅價 四十二
錢

郵定稅價 四十五
錢

家庭科學

◎ 第一編 動物のはなし

(以下續出)

(印刷中)

明治二十三年二月創刊

國民新聞

（每號八頁隔週に）
特別附録あり

定	一ヶ月	二ヶ月	三ヶ月	半年	一年
價	六圓	十一圓	十六圓	二十九圓	五十四圓
郵方	三圓	六圓	九圓	十六圓	三十一圓
地	三圓	六圓	九圓	十六圓	三十一圓
稅	七圓	十三圓	十九圓	三十三圓	五十九圓
郵方	一圓	二圓	三圓	五圓	十圓
地	五十六圓	九十九圓	一百四十二圓	二百零四圓	三百六十六圓

廣告料 一行の代價左の如し（但五號活字廿二字詰） 一回廿五錢 三回以上卅二錢 特別（第一面）四十五錢

世界に於ける新聞の王とも稱す可き倫敦「タイムズ」に曰く、「國民新聞は日本に於ける最も公共心ある重なる新聞の一なり」と。今や公平の意見と、精確の報道に接せんと欲する人は、其の政治家たり、實業家たり、軍人たり、教育家たり、學生たり、高等専門職業家たり、地方紳士たり、都府の市民たる人に論なく、國民新聞を愛讀せざるものなし。されば國民新聞は、其名の示す如く、國民の最も高尚にして、品格あり、實力ある部分に行はれつゝあれば、廣告の機關としても最上の一なることは吾人の確信する所也。

發行所

東京市京橋區日吉町四番地
電話新橋七十番（長距離加入）

國民新聞社

民友社書籍賣捌所

注意 (一) 此に列擧する賣捌店は本社直接に取引する店又は特別に罷入申込みし分に限る
(二) 故に全國に於て間接に賣捌かるゝ店は此他に多數ありし知らるべし
(三) 間接賣捌所にて店名廣告申込みあれば追々掲出すべし
(四) 賣捌所にして取引中事故あり停止又は拒絶したる店名は茲に其事故を掲載することあるべし

東京市神田區裏神保町	上田屋	同	京橋區弓町	松邑孫吉
同 表神保町	東京堂	同	芝區三田四國町	宇佐美書店
同 京橋區館屋町	東海信文合資會社	同	赤坂一木町	山口書店
同 同 町	北隆館合資會社	同	麹町區飯田町	神戸書店
同 京橋區采女町	警醒社書店	同	麻布六本木町	北原書店
同 日本橋區本石町	鶴屋喜右衛門	同	日本橋區麴町細	二十世紀書店
同 赤坂區青山南町	山陽堂	同	神田區裏神保町	渡邊書店

17/2/56

東京市本郷赤木町	小杉商店	神戸市元町五丁目	吉岡支店
同 本郷四丁目	文明書堂	同 市元町五丁目三十四	石九日東館
大阪市備後町	吉岡書店	同 市元町一丁目	川瀬日進堂
同 同	岡島新聞舗	名古屋市本町	川瀬代助
同 心齋橋筋淡路町北へ入	中村正兵衛	同 玉屋町	静観堂
同 四區常安橋南詰西へ入	文徳堂	廣島市鹽屋町	積善館支店
京都市佛光寺通り	東枝律書房	同 東横町	弘文館
同 三條通宮小路角	便利堂	東京府下八王子町	熊澤兼太郎
同 寺町通り	飯田信文堂	山城國向日町	須田正進堂
同 河原町	大黒屋	丹波國福知山柳町	足立攻城館
同 二條通り河原町東へ入	檜文館	同 同	越山文進堂
同 丸太町寺町四	前川書店	大阪府豊能郡池田新町	鹽川豊翠館
横濱市吉田町一丁目	第一有隣堂	丹波國柏原町	中井正吉
同 伊勢佐木町	勉強堂書店	但馬豊岡町	由利安助
同 野毛町	第二有隣堂	淡路國洲本町	成錦堂

越後水原町	西村六平	野州足利町	三泉堂
同 長岡表四の町	目黒十郎	同 黒磯	大槻新聞舗
同 高田町	高橋書店	伊賀國上野農人町	安屋勝次郎
同 高田町	室直支店	伊勢國松坂	清玉堂
同 新發田町	萬松堂支店	三州豊橋	富田安
同 龜田町	潤身堂	遠州掛川町	叢文堂株式會社
同 尼瀨	佐藤清三郎	静岡市免服町	内田書店
新潟市古町通	北光社	同 同	太陽堂
長崎市野屋町	安中半三郎	甲府市柳町	眞誠堂
同 同	集榮堂	大津市	文泉堂
武州川越町	集成閣	近江長濱町	同支店
武州見玉町	中村文會堂	美濃大垣本町	渡邊商會
茨水縣水海道町	新々堂	飛騨高山町	平田鈴吉
上野宮岡	木田商店	信州長野市	齋藤祥三郎
上州原町	山口商店	同 市	西澤喜太郎

同 市
 同市新山町
 信州上田町
 同 野澤町
 同 岩村田町
 同 松本町
 同 町本町二丁目
 同 洗足
 仙臺市國分町
 同 大町
 同 新保馬町
 同 白河町
 同 白河町
 同 白河町

信濃毎日新聞社
 荻原朝陽館
 西澤支店
 岩下新聞舖
 文盛館
 鶴林堂
 慶林堂高美書店
 都筑文明堂
 佐勘書店
 木文書店
 但木芳次郎
 漸進堂
 鈴木萬助
 奧村書店
 石井書店

盛岡市
 隨中一ノ關大町
 青森縣青森市
 同 弘前市
 青森縣八ノ月
 山形市
 同市十日町四百二十六
 羽後國秋田市茶町
 同 市縣福臨通
 同 増田町
 同 大館町
 若州小坂
 石川縣小松
 同 金澤市
 能登飯田町

鶴鳴閣
 文港堂書店
 鎌田書店
 桂華堂
 伊吉商店
 八文字書店
 荒井明治閣
 成見清兵衛
 大島開成堂
 東海林書店
 越後屋虎五郎
 吉岡昌太郎
 宇都宮書店
 同 支店
 河内勇作

富山市東四十物町
 同 市
 同 市佐佳枝町
 高岡市守山町
 越中川邊
 鳥取市上魚町
 同市智頭
 同市東町八十八番地
 伯州倉吉
 山雲國松江市
 同 市天神町
 岡山市弓之町百三番地邸
 同 市四大寺町
 同 市丸龜町
 同 市上元町

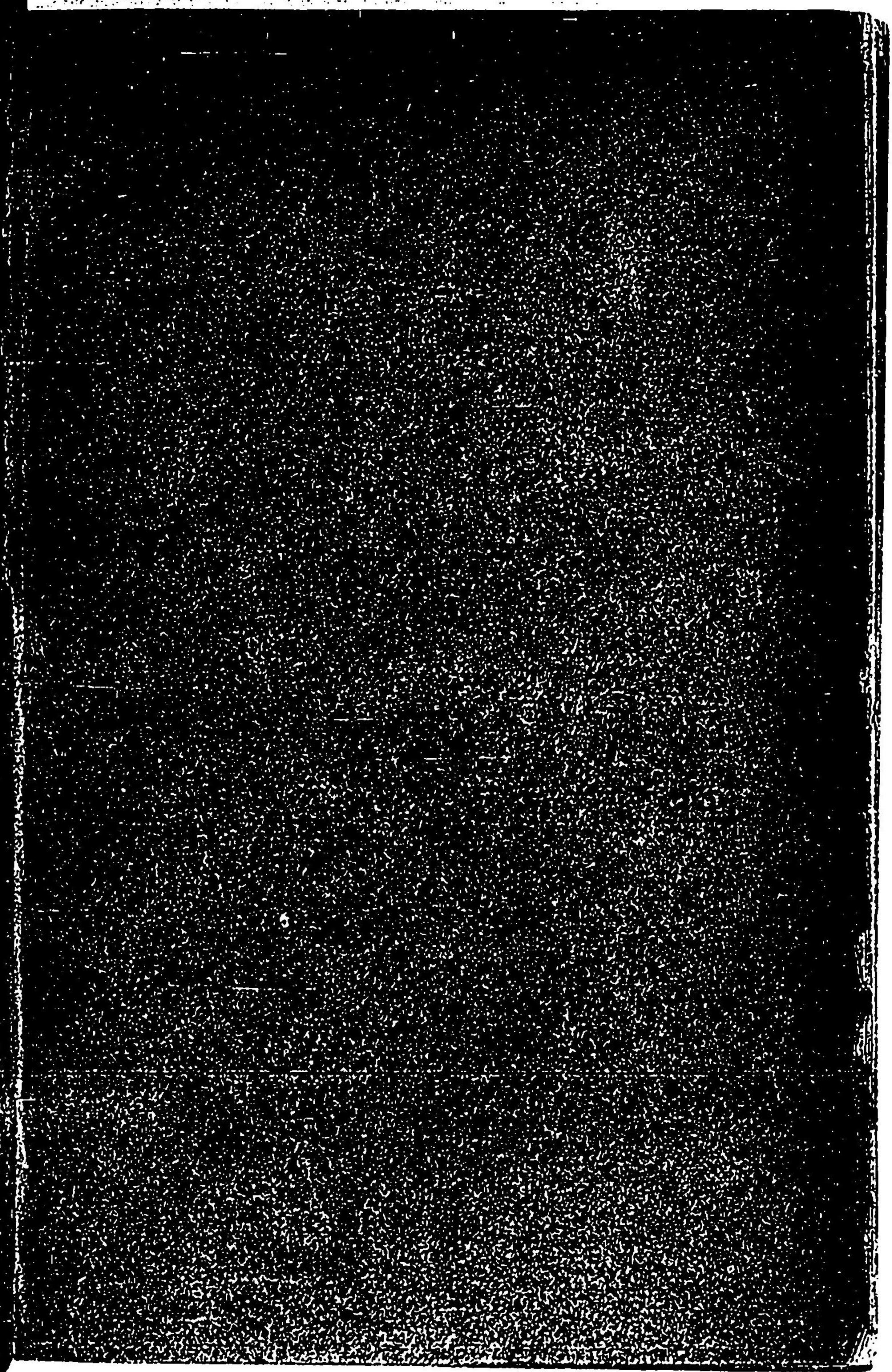
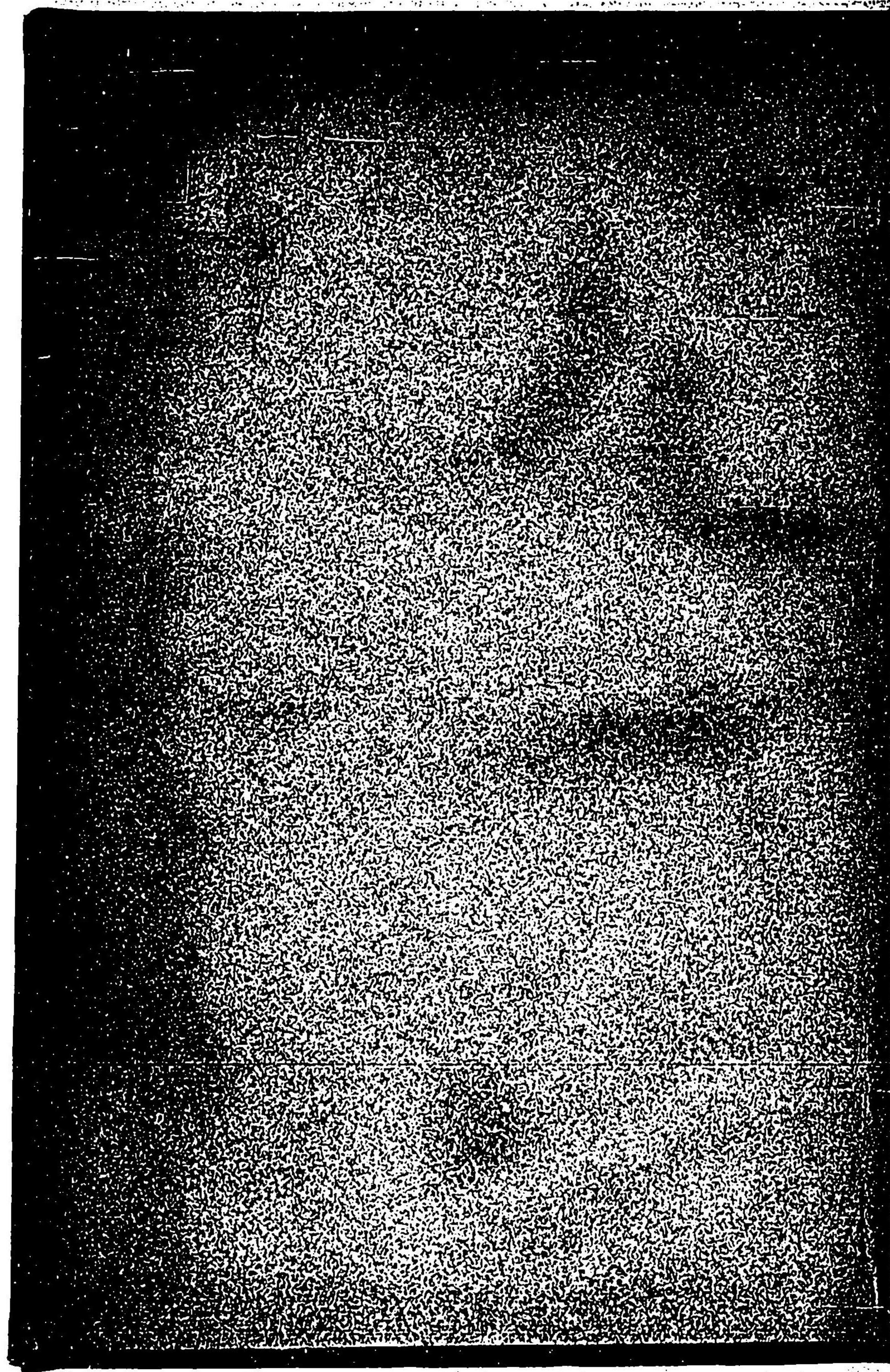
中田書店
 小林清重堂
 日新堂
 學海堂
 弘文堂書店
 山本吉太郎
 藤谷旭日堂
 久松堂書店
 鳥飼榮藏
 川岡清助
 大蘆一年舎
 周營堂
 山本金正堂
 吉原弘文堂
 本郷綴文堂

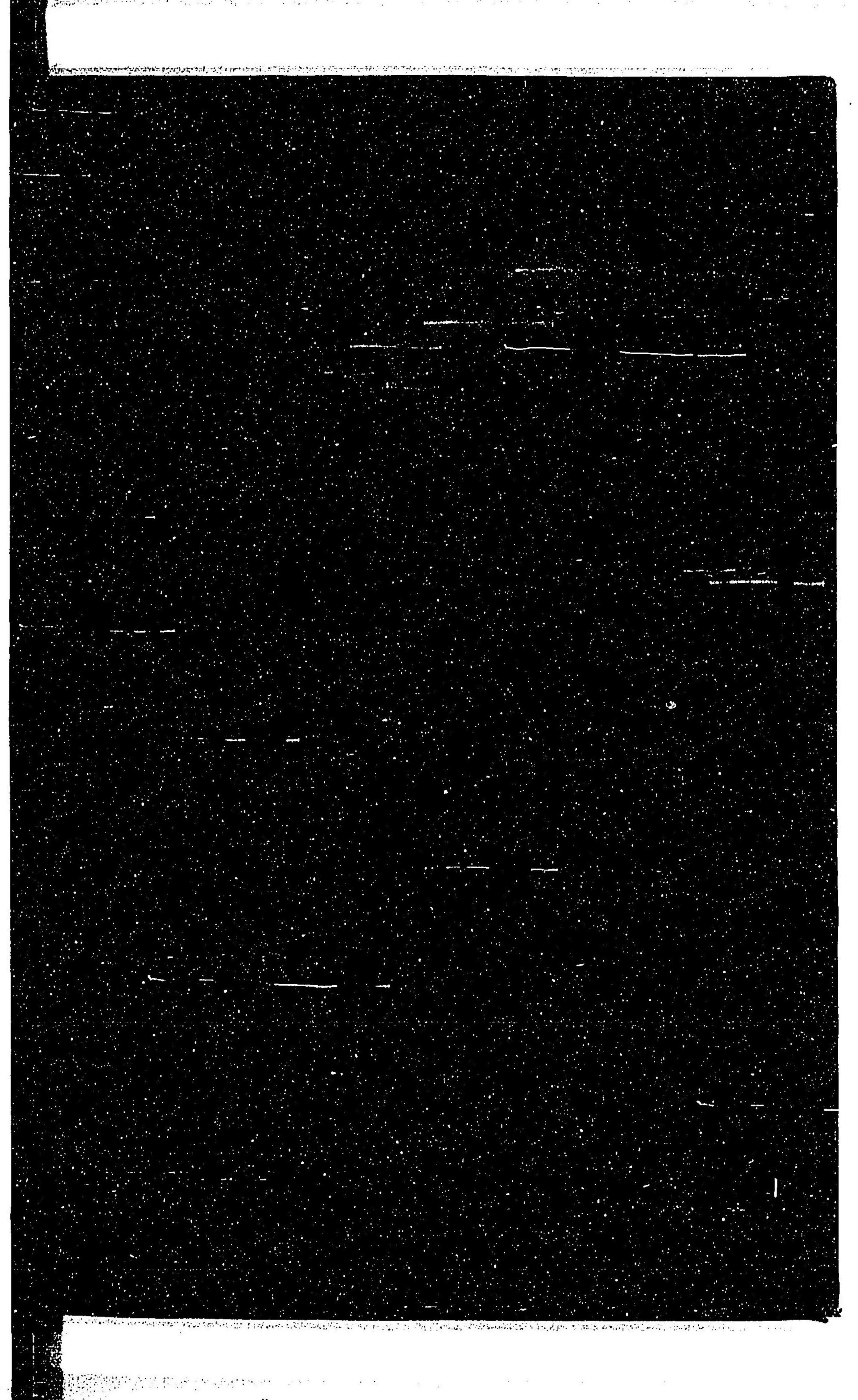
作州津山元魚町
 備中非原町
 山口縣山口中市町
 山口縣馬關
 周防國岩國
 愛媛縣松山市
 同 宇和島町
 同 宇和島路通郡役所前
 高知市
 福岡市博多
 同
 筑前若松町
 筑後久留米市
 同 八女郡里見村大瀨

横山萬竹堂
 萩田書店
 超世館
 山名書店
 白銀日新堂
 向井藤次郎
 日進堂書店
 杉山靜清堂
 開成舎
 積善館支店
 眞海書店
 森岡書店
 石松國吉
 菊竹書店
 野田成章堂

同 三浦郡大津田橋口町	上野書店
豊前中津町	野依曆三
豊前行橋町	高橋種成
大分縣大分町	甲斐治平
同	菁莪堂
同 縣竹田町	高野菊三郎
佐賀市	大坪書店
熊本市新町	長崎次郎
同 南新井町	好文堂
同 上通五丁目	中山知新堂
同 上通三丁目	博文堂
同 通町	石原書店
肥後八代町	時昌堂
同 菊池郡隈府町	中島常平

宮崎上野町	修進堂書店
鹿児島縣鹿児島市	吉田幸兵衛
同 同	金光堂
同 同	谷村書店
北海道札幌南一條四三丁目	進振堂
同 南一條四三丁目	廣目屋
同 同	富貴堂
同 道小樽港	川南重祐
同 石狩國上川郡旭川一條通七丁目	旭書院
同 道室蘭港札幌通り	最上谷治吉
同 道十勝國帶廣大通七の十	久富書店
新潟縣隆草花街十一番戸	小西日進堂
同 盛南草花街	龍泉堂
韓國仁川港	山岡書店





96
28

022144-000-1

96-28

地理学小品

矢津 昌永/著

M35

ADA-0549

